
魔法少女リリカルなのは Another Knight

志暮春人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Another Knight

【Nコード】

N8694I

【作者名】

志暮春人

【あらすじ】

目が覚めればそこは、似ているようで違う世界。魔法のような信じられない事が起きていて、しかも、巻き込まれて早々に気を失う事になるとは…。

これは『魔法少女リリカルなのは』にオリジナルキャラである主人公が登場する作品です。

・お知らせ

このまま物語を進める上で、ストーリーの大筋に重大な齟齬が発生

する事に気付きました。よって、本文を一から改訂し、新しく一話から練り直したものを投降しようかと考えております。
この作品を読んで下さる読者様方には大変ご迷惑をお掛けしますが、それまでお待ち頂ければと存じます。

12/9 移転しました。

12/13 掲載再開のお知らせ・本編全てを加筆修正しました。

2010年

1/21 第三話を改訂致しました。申し訳ありませんでした。

Prologue (修正版) (前書き)

この作品は『魔法少女リリカルなのは』を元に、主人公にオリジナルキャラを据えた二次創作小説です。こういったものを忌避される方はご注意ください。

また、オリジナルの考察に基づく二次創作ゆえに原典とは違う点もあります。そこはご容赦頂きたく存じます。

構わない方はご一読下されると幸いです。

12/8 改行、ルビのおかしな点を修正しました。

12/13 本文を加筆修正しました。

Prologue (修正版)

夜空に月が浮かんでいる、と言えば語弊があるかな？

しかし、俺には他にこの世界を上手く説明出来る言葉が見つからない。見渡す限りの真っ暗闇が続く中で、頭上ではなく眼前に光る月の形をした物があるというだけの世界。

ただ、その光る物は大きさがはるかに小さくて、丁度掌サイズくらいしかなく、正確に言えば月ではないのかもしれない。同様に、真っ暗闇も漠然と月があるから夜空かと思っただけで、星は見えないし、本当は違うのかもしれないな。

しかし、他に言い表す言葉が見当たらない上に、何となく“夜空と月である”と分かってしまうのだから仕方がない。俺の中ではこれらは、“月と夜空”なのだ。

どれぐらい見続けていただろうか、唐突に世界が変わる。

一面の暗黒は塗りつぶしたような赤に、輝いていた月は消え、黒い板のようなものと変わっている。慌てて周りを見渡せば、文字通り世界は燃え上がっていて、視界全てを炎が覆っていた。

と同時に、周囲で猛る炎が圧倒的な熱量と光となって、俺へと迫ってくる。慌てて抵抗——防ぐイメージで咄嗟に突き出した右手、そこに生まれた深紅の三角形の盾で、正面から迫る炎を食い止める事には成功した。どういう原理か分からないがかなりの強度を持つらしく、炎はせき止められている。

がしかし、防げてもし詮は一方向。上下左右から迫る炎には何にも対処が出来ず、見る間に炎は俺の体を——

「……くはっ！？ はあ、はあ、はあ……」

圧倒的な炎に焼き尽くされると思った瞬間、飛び起きる。大きく

息をつきながら辺りを見回し、見慣れた部屋、ずり落ちた布団が確認できた所で漸く夢だと思い至る。

「また、か…」

もう何年になるか数えるのも億劫なほど、よく見る夢だ。しかしそれは前半の、夜空と月の部分だけだが。ここ最近ではそれだけでなく、後半の炎に焼かれそうになる部分が追加され、何とも夢見の悪い事になっている。おかげで、寝起きも悪くなると言うものだ。毎回毎回妙に臨場感があるのもそれに輪をかけている。

しかも、夢は回を追う毎に炎の質感がリアルになり、気が滅入る事この上ない。今回は炎の熱さを感じられるほどだった。

果たして、夢に炎が追加されたのはいつだったか…と振り返ろうとして、止めた。

起きたという事は朝であり、朝ということは学校へ行かねばならない。これから一応の友人達と会うのに、わざわざ進んで不機嫌になることもないか。

気分を切り替えよう、また一日の始まりだ。

「んじゃまたな、雄司」

「おう、じゃな」

「後の仕事は任せるね、水無瀬君。それじゃ、また明日」

「はいよ、お疲れさん」

去っていくクラスメイト、同じ日直の女子の挨拶に律儀に一声ずつ返し、書いていた日誌を閉じると俺も帰り支度に移る。

最後に戸締りの確認で手を掛けた窓は、沈む夕日を遮る事無く見せてくれて目に痛いくらいだ。

と、耳障りの良くない、あの声。

――。

ああ、またか。

これもまた、夢と同じく最近特に増えてきた“空耳”だ。いつものごとく明瞭には聞き取れないそれだけど、逆に何を言っているのか気になる。

もうかれこれ五年ほど――中学入学から高校二年の今までずっとだ――夢と同様に聞き続けているというのに、どうにも慣れない。初めのうちは頻度もごくまれで、それこそ聞き流せる、無視できるようなレベルだったのにな……。

最近は気を抜けば聞こえてくるようになり、どうにも気になって仕方が無い。他の事が手に付かなくなる事もある。おかげですつと続けてきた部活動も最近はご無沙汰だ。もともと部員とはちよつと溝があつたし、休部の連絡はしてあるから問題ないものの、憂鬱である事には変わらない。はあ、自信もあつたし、先生には一年から期待されてたのにな……。

って、今はそれよりこの“空耳”か。せめて聞き取れれば少しはマシに――

――うー。

——ん！？　今、少し明瞭に…。

——。

やはり聞こえない。これでは、本当に聞こえたのか気のせいかならないな。

——くん？

また聞こえた！？　今度は今までに無く明瞭だ。発音、方向性もはつきりと分かる。丁度俺の後ろから——

「水無瀬君？　どうかしたの？」

「あ……」

振り返れば、声の主はいた。けれど探していた声ではない。

それはそうだ。何せ正体はうちの担任で、かつ俺が所属していた部活の副顧問の先生だからな。

……残念、空振りか。

「日誌が届かないから様子を見に来てみたのだけど……ボーっとして大丈夫？」

「あ、すいません。これです」

催促に従って日誌を渡す。そういえば、どれぐらいぼんやりして

たのだろう？ 主観的にはそんなに時間は経っていないはず…と思ったが、三十分経ってる。これは心配されても仕方がないか。にしても…なんと律儀な先生だろう。新任らしいから張り切るのは分かるけれど、にしてもわざわざ来てくれるとは。

「うん、確かに受け取りました。それじゃ、もう施錠するから下校しなさいね」

「…なるほど、確かに取りに来る訳だ」

「うん？ 何かな？」

「いえ何でも」

危ない所だった、声に出していたか。変に突っ込まれても嫌だからさっさと切り上げるに限る。

はあ、妙な夢や“空耳”が聞こえる様になってからこんなのがかりだ。あれか、心療内科とか耳鼻科とかにでも行ったほうがいいのかな？

「そう？ …そうだ、あの、空手部は…」

「…ああ、その…すいません、まだちょっと家がゴタゴタしてて」

気まずい。分かってはいても期待が混じってしまっているであろうその問いに、否定をしなければならぬのは何とも気まずい。

俺としてはこの“空耳”や夢からくる寝起きの悪ささえなければ活動できるのに。わざわざ嘘について部活を休まなくて済むものにな…。

いやまあ、家の事情と言うのも嘘ではないのだが。

兎も角、この気まずい空間からは逃避したい。さっさと帰るとしよう。

「…そう……」
「ごめんね…」

「いえ、ありがとうございます…。それでは、サヨウナラ」
「あ…う、うん、さようなら」

すみません、先生。

結局、逃げるように後にした校舎から暫し。通学路でも空耳が二回聞こえたけど、何とか“無事に”帰ることが出来た。

この“無事に”というのは、普通に考えればたかだか帰宅するだけなのに何を大げさなと思うかもしれない。しかし、俺の場合は結構重要だったりする。

と言うのも、空耳が聞こえるとどうも意識をそっちに割いてしまうのか、周りに対して不注意になってしまつらしく、何かにぶつかったりこけたりしてしまう事も多々あるのだ。まして、“空耳”がひどい時は軽く頭が痛くなって周りを見る余裕がなくなり、輪を掛けて酷い。

まあ、ならばさっさと医者に行けって話だが、それもちょっと訳ありでままならない。

「ただいま」

ドアの鍵を開け、一声掛けて靴を脱ぐ。返る声はない。これが訳ありの、その訳。

いわゆる、一人暮らしと言うヤツだ。これも丁度——或いは何の偶然か、夢や“空耳”と同じく、中学入学と同時にこの状態が続いている。

そう重い事情があるわけではない、と思う。単に家族と暮らして

いないだけだ。死別ではなく、元からいない。父親は顔も知らないし、そもそも居た事がない。母親がいると言う事は父親も居るのだろうけど、離婚したのかそもそも未婚なのか、それは知らない。話は聞いた事がないし聞きたいとも思わない、ならばそういうものなのだろう。

で、当の母親とも住んでいないだけだ。普通ならば寂しいと思うかもしれないが、俺はもう慣れた。

母親が俺という苦痛を感じるらしいのだ、ならば離れるのがせめてもの親孝行と言うものだろう。小学生までは育ててくれたのだし、非難する気はない。話した人みなが珍しがり、悲しんでくれるのだが、慣れた身としては反応するのがもう面倒になりつつある。

んん？ 待てよ？ すると、一般的に悲しまれると言う事は、意外と重い事情になるのか？

しかし、母と子が別居している家庭なんていくらでもあると思うけどなあ……どうなんだろうな？ 俺は母方の実家が面倒見てくれているだけ、ありがたい方だと思うけど。

向こうは嫌々らしいけど、内心は兎も角、生活費などの先立つ物をくれるのはありがたい。まだ学生の身だと特に。

まあそれでも、無駄に使うほど余裕があるわけでもなく、例えば病院にも気軽には行けないのだが。

「ただいま、爺さん」

部屋へと上がり、仏壇に向かって手を合わせる。この人は母方の実家の人間にも拘らず、唯一俺を擁護してくれ、そのおかげで先立つものが貰えているのだ、たまには声を掛けるだけでなく、丁寧に手を合わせないとな。それだけでなく、俺が施設のような物に入らなくて済んだのも、俺がこうして生きてこられたのも、ついでに、空手やその他武道について余すところ無く叩き込んでくれたのも、

爺さんのおかげだ。

…そう思えば、今までまで蔑ろにしてきたのがちよつと悪かった気になるな。武道についてはちよつとどうかと思わなくもないけど。まあ今更か。俺も爺さんもそんな柄じゃないしな。

爺さんは何事にも厳しく、墮落を許さず自立を尊び、生活は規則正しく健康志向で、しかも文武両道…特に武道においては文字通り血を吐くまでやらされた。かく言う俺は俺で爺さんを敬わず、反発と従属を上手く使い分けながら気まぐれに暮らしてきたし、お互い様だ。

今思えばどんな爺さんだよ…よく無事だったな、俺。

とは言え、そのおかげで今こうして一人暮らしを出来ているのは感謝するし、死んだときは悲しかった事を考えると、あれでも愛情はあつたんだなあ、なんて思わなくもない。

いやまあ、こつ恥ずかしいから言う気はないが。

兎も角、感謝はしているのだ。

S i d e ?

まだ届かない。

もうどれだけ呼び続けたか、どれだけ誘ったか分からない。
でも届かない。

急がなければ、間に合わなくなる。

既に第一の幕は上がって久しい。
事態は動いている。

このままではいけない。

第二の幕が上がる前に。

……。

仕方ない。

強引だが直接喚ぶしかない。
形振り構ってはいられない。

今夜だ。

今夜にでも決行しよう。

…ごめんなさい、我が主。

S i d e o u t

濡れた髪をタオルでガシガシと拭きながら、ベッドに座る。

あれから、復習予習、日課のトレーニングを終えれば、あつという間に夕食の時間を過ぎていた。元々帰って来た時間が遅かったせいだろうが、仕方がないとは言え夕食が簡単になってしまったのは何とも残念だ。普段なら腕を振るってこだわるのに。

「はあ…あふが…」

知らず、ため息が漏れる。欠伸交じりで音が変になってはいるが、どうも今日は疲れたようだ。

無理もないか、久しぶりに自分の事について考えたのだし、このところ“空耳”や夢見の悪い夜も頻発しているのだ。さつさと眠る事にしよう。ただでさえ寝起きも悪いのだ、少しでも睡眠時間が欲しい。

「ふあゝあ…寝よ寝よ…」

早々に布団にもぐりこむと、すぐに眠気はやってきた――。

……。

—。

ん…真っ暗に光？

—。

ああ、またあの夢……じゃない？ 音が聞こえる？

—。

良く分かんが勘弁してくれ、眠いんだ…。

—t e r？

……何だよ？ 聞こえないぞ？

—i s t e r？

何だつて？ はて、この音、どこかで聞いたなような……あ！？

—M e i s t e r？

…やはり、間違いない。いつもの“空耳”と同じ音、いや声だ…。

—E i n M e i s t e r？《我が主？》

でも、この真っ暗闇の夜空と光る月は…あの夢だよな。炎はまだ……うん？ 話しかけてくる？

— Der Meister, den schlie?lich
zu treffen ich?higwar.《漸くお
会いできました、我が主》

……へ?

— Ein Meister?《我が主?》

……何語? 英語ならそこだけど…あ、Can you
speak Japanese?

—。

……。

— 漸くお会いできました、我が主。

…お、おお。ええと、どうも…って、何だって? あるじ?

— はい。ずっと呼びかけていたのですが、漸く認識して下さいま
したね。

…はい? 何の事ですか? と言うか君は?

— 残念ですが、答える暇も惜しいです。今からお迎えますので
その後で。

…え!?!? ちょ、何が…!?!?

眩しい光に強引に意識を覚醒させられる。微かに感じられるのは浮遊感と頭から引つ張られているような感覚。

辛うじて分かるのは、瞼を閉じていても分かるような激しい光が差している事と、何故か落ちているような感覚がする事。おかしいな、俺は布団派なのに…これは二段ベッドでもこんなに高くないぞ？と、漸く光が収まってきたな。足も地についてるし、どうやら立ってるのか？

一体何さ、炎の夢を見なくて済んで、久しぶりに少しはマシな人の安眠を妨害しやがって――

「ったく、何だよ。今何時だと……え？」

時計を見ようとして開けた目。

それは、時計でも部屋でも、見慣れた何かを映すではなく、視界を覆いつくさんばかりの枝葉を捉えた。そして、緑が生い茂った隙間から茜に色づいた空が見える。

「あれ？」

慌てて周りを見渡すも、目に映るのは自分の部屋ではない。ひび割れたコンクリートと鉄筋、車らしき物の残骸、逃げ惑う人々、そして何よりも存在感を示す巨大な木の幹。想像の範疇を超えたものが目に入った。

「…何事？」

『説明する時間が惜しいです、早くここから退避を！』

夢で聞いた“空耳”が、これ以上ないくらいはつきりした“声”
となつて聞こえてくる。有無を言わせぬそれは、しかしどうやら遅
かつたようだ。

視界を覆う太さの木の枝。それが豪快にコンクリートを砕きなが
ら、此方へと迫ってくる。

避け様の無い危機であるにもかかわらず、状況が分からない上に
実感が無いせいか冷静にそれを眺めている俺が居た。

うーん、これは当たったらほぼ確実に死なないか？

「あ」

『くつ!? Panzerschild!』
『Jawohl!』

このまま行けば当たる、と思つた瞬間。目の前に真つ黒の、あの
夢で見た炎を食い止めた三角形と同じ形をしたものが薄らと出現す
る。何故か微かな喪失感を感じるが、その間に三角形ははつきりと
形をなして展開し、迫る枝をギリギリで食い止めた。

何だこれは、夢と同じく三角形をしたものは、俺の身を守ってい
る？

『我が主、今の内に退避を!』

焦つたような“声”、軋みを上げる漆黒。枝と拮抗したかに見え
た三角形だが、夢のような強靱さは無いのか、どうやら限界が近い
らしい。焦る“声”の言葉からして、この三角形は“声”が生み出
したものなのだろうか。

輝が入る三角形、今にもそれを食い破らんとする枝に、漸く思考
に没頭していた意識が現実と対面する。

マズイ、あのままでは三角形が破られる。破られると俺に当たる。

あんな太さと力強さを持った枝だ、当たれば一溜まりも無い。

「…っ」

危機に思い当たるや否や、今まで平気だった事が不思議な程の焦燥が湧く。その感情は恐怖ではないのがあるが、この場においては何の慰めにもならない。何を思おうが、どう考えようが、逃げねば終わる。

鈍重な足が動き始めると、三角形が砕けるのはほぼ同時だった。

「―かはっ！」

枝が体を打ち付ける。いつの間にか身に纏っていた深紅の何かを守ってくれたのか、思った程衝突の勢いは無かったようだ。

しかし、それでも衝撃を完全に殺すことはできず、一瞬の浮遊感の後、体中を痛みが駆け抜ける。

どうやら吹っ飛ばされたらしい。

「ぐ…あ…」

『我が主！』

地面に落ちたせいか、息が詰まって苦しい。呻く様な声が自然に漏れる。“声”が呼びかけてくれるが、答えられない。

それよりも逃げねば…このままここに居てはいいのだ。

しかし、意思に反して体は反応してくれず、足は動いてくれない。それ以前に、起き上がることが出来なかった。

『――！』

“声”が何を言っているかが分からない、聞こえる言葉が頭の中

で意味を成さない。妙な倦怠感が体を包んで、段々と視界が暗くな
っていく。

これは拙い、と思うものの、抗う事ができない。

何故か枝は襲い掛かってこないが、それも時間の問題だろう。せ
めて、最後は目を逸らさずに見ていたい。

『——！？』

振り返った光景。

何処からか現れた桜色の光が、圧倒的な勢いで枝を含めた木々を
なぎ払うのを最後に、俺の意識はそこで途切れた――。

side ?

「遅かった…」

「来て早々で幸いいいけど、簡単じゃないって事さ…」

私が降り立ったのは無人の小さな裏道。ここに来るまでに見た大
通りほどではないけれど、至る所に破壊の後が見て取れた。

この世界に降り立ってすぐ、ジュエルシードらしき反応を感知し
たからで急いで来てみたのに、既に事は済んだ後らしい。

「これだけの被害…魔導師かな？」

「そうさねえ…ジュエルシードが無いんだし、その可能性は大いに
あるよ。もしかしたら、元の持ち主が回収してるのかも？」

それは、困る。

元々私たちの物じゃないからそんな事を言う資格はないかもしれないけど、あれは母さんが欲しがっている物だ。持ち主には悪いけど、私達が手に入れなければならない。

母さんが何に使うかは知らないけど、必要としているのなら私の手でプレゼントするんだ。

「…一応、魔力探知の魔法を掛けるかい？」

「そうだね。何か手掛かりが掴めるかも知れない、試してみよう」

「あいよ、じゃあ、アタシがやるよ」

「大丈夫？」

「勿論さ。これから戦いになるかもしれないし、魔力を温存しないと」

「分かった、お願い」

「任せな！」

頼りになる私の半身の、狼の使い魔が発動させる魔法陣を見つめながらも、ふと思う。

そう言えば、ジュエルシードが欲しいって言ったときの母さんは、どこかいつもと違ったような気がした。滅多に笑う事のない母さんだけど、その時は微かに笑っていたかな…。

それほどまでに重要な物だと言う事かな？ それなら、ジュエルシードを私が届けてあげれば、また昔みたいに笑ってくれるよね…？

「……ん？ これ……ねえ、フエイト」

「！ 何、アルフ？」

物思いに耽る私を、使い魔のアルフの声が現実へと呼び戻す。
そんなに時間は経ってないけど、近くで何か見つかったのかな？

「うん…妙な反応があるんだ。ジュエルシードじゃないけど、魔力を感じるよ」

「魔力反応？　っ！　もしかして、持ち主？」

「かもしれないね…あっちさ」

もしここで持ち主に会えたら、すぐにジュエルシードが手に入られる。その為には多少手荒になってしまう事もあるけど…後で何度でも謝ろう。

だから――

「見つけたよ！　あれが反応の元だけど……」

「……人が倒れてる」

アルフが指差した先、魔力反応のあった路地の陰には、一人の人が倒れていた。

まだ遠目だから良く分からないけど、背格好からするとバリアジヤケットは着ていないみたい。ここまで接近して反応が無いなんて…気絶してる？

魔力反応はあったけど、こうしてみると一般人にしか見えない。持ち主かと思ったけど、違う可能性もある。私達みたいに探している人かな？

でも、よく見ると細かな怪我をしているようで、もしかして、ジュエルシードの発動に巻き込まれただけ？

「やっぱり、ジュエルシードの反応は無いねえ…どうすんだい、フイト？」

「……」

本当に、どうしよう？

何れにせよ、巻き込まれたのなら何か知っているだろうから話を聞きたいけど、起きる気配は無いようだ。怪我をしているし、放っておくのは気が引けるけど、かといってもし管理局の人間だったりした時は接触自体が避けるべき事だ。

その点から考えると、既に接触してしまっている事はいいかな？ 向こうは気が付いていないみたいだけど。でも、管理局の人間なら救援が来ているだろうし、こんな所に一人でいる可能性は低いと思う。怪我をしているのなら、尚更急いで助けるべきだ。

それなら…決めた。私達と敵対する可能性も無きにしも非ずだけど…何より放っておけない。もしかしたら、何か情報を聞き出せる可能性もある。

「…連れて帰ろう、アルフ」

「な！？ 本気かい？」

「うん。連れて帰って、怪我の手当てをする変わりに、話を聞く。

持ち主なら良し、巻き込まれたのなら、何か情報を」

「それはいいけど…：はあ、仕方ないねえ。まあ、それがフェイトらしいよ、やっぱり優しい」

「ごめんね…」

「いいさ。それに、こんな所で野垂れ死なれては目覚めが悪いもんね」

「ありがとう」

優しい…か。そうなのかな？

ジュエルシードが欲しい事には変わりないけど、なるべく被害を出さずに済ませたい。手助けできるのなら、助けてあげたいと思うけど、今回は情報を優先しているだけだと思う。

「じゃあ、連れて帰るよ……おや？」

狼から人の姿になったアルフが、人を抱きかかえようとしてとじて動きを止めた。何だろう？

「ほら、フエイト……」

「あ……男の子？」

怪訝に思つて覗き込んだそこには、私と大して年の変わらない男の子がいた――。

S i d e o u t

Prologue (修正版) (後書き)

如何でしたでしょうか？

乱筆乱文にて失礼致しましたが、楽しんで頂けたなら幸いです。

移転、再掲載の流れで加筆修正しましたので、流れが変わっております。以前の展開のほうがよかったと言う方には申し訳ありません。ですが、きちんと彼女も出てきますのでご了承下さい。

ご意見ご感想は変わらず広く募集しています。また、アドバイスや設定の間違いについてのご指摘はありがたく頂きます。宜しく願います。

最初の出会い（修正版）（前書き）

お待たせ致しました、『魔法少女リリカルなのは Another
Knight』第二話をお送りします。

12/13 本文を加筆修正しました。

最初の出会い（修正版）

S i d e ?

間に合った。

何とか喚ぶ事が出来た。

無理を押して召喚して、小さくない犠牲を払ったものの
召喚して、いきなりの危機に見舞われたものの

何とか切り抜けて、一息つけるようになった

失ったものが大きくてままならないが
早急に喚ぶ必要に駆られていた記憶はある

ならば
歩を進めよう

幸い、主は半ば覚醒しているようだ

話しかけよう
そこから意味が始まるのだから

Side out

真っ暗な世界。ここ最近見続けている夢と似ているせいか慣れた印象を抱く夜空から、眼前に浮かぶ月に視線を移しつつ、もう何度目かも分からないけれど自問する。

体がないのに意識があるのは何か、一体俺の身に何が起きたのかを。

…夢だと思っていたら、でっかい木に襲われたって？　んなバカな。

目覚まし代わりの一発だとしても、限度ってモノがあるだろう。

自分の部屋に植物は置いていないし、そもそも目覚めた場所は初めから自分の部屋じゃなかった。しかも、あんな太い枝で叩かれては、起きるどころか目覚めない眠りについてしまう。運よく現れた真っ黒の三角形と深紅の何かに勢いは殺されたようだが、吹っ飛ばされた記憶を最後に今こうして夢に似た妙な世界の中に居る。これがいわゆる死後の世界とやらではないかと考えられなくもないし、やはりあのときに自分は死んだのだろうか。

…そういえば、あの時の三角形といい、深紅の何かといい、何だったんだ？

普段、夢の中で散々見ていたもの、夢見の悪いときにはいつも出ていたもの。しかし、あの木の枝を阻むように展開した様は、まるで俺の身を守ってくれるかのようにだった。

俺を苦しめたり守ったり……一体何だというのか。

……薄らと出てきたと思ったら見る間に形を成して……そうそうそんな感じに——え？

いつの間にか、眼前から月が消えて、その真っ黒な三角形が現れていた。真っ暗な世界に黒では見えないだろうに、その三角形は黒色ながら光っていて、容易に認識できた。イメージするならば蛍のようなぼんやりとした、幻想的な光とでも言うべきだろうか。

それらは寄り集まるように凝縮し、小さな、丸い宝石のような形となった。そして、何度か弱く明滅すると、宝石を頭に掌サイズのカードのようなモノを形成し、ふわふわと浮かんでいる。

……な、何コレ？

戸惑うのもつかの間、そのカードらしきものの宝石の部分ががはつきりと明滅し、あの聞き慣れた声が届いた。

『——ご無事でしたね、我が主？』

「……うえ！？ お前……その声は！？ いや宝石がしゃべった！？

何コレ……って、おお……感覚がある！？」

それまで意識で独白、と言うよりは心中で思っていただけの内心の言葉が、急に“直接の”言葉として口に出したような感覚に切り替わった。同時に、聞こえた声も意識にではなく、耳に直接響く感覚がする。

それに、何となくだが浮いているような感覚。味覚と嗅覚が感じられないのが残念だが、それ以外の感覚がはつきりと認識できた。

『はい。漸く落ち着いて話が——』

「——誰だっけ、と言うか何だっけ？」
『…………』

あ、明度が落ちた。

いやでも、仕方ないだろ？ お互い声しか聞いていなかったし、自己紹介なんてしてなかったし、そもそも姿を見たのが初めてだし……なあ？

つか宝石って……しゃべる宝石って！ なんてファンタジー……。

『……………そうですね、失礼しました。改めて初めまして、ユニゾンデバイス“月の朶”と申します。』

「……………はあ。ええと、水無月雄司だ……」

ユニゾン、デバイス。直訳すると……同音階の回路？ 斉唱の装置？ 何の事だ？

聞き慣れない言葉だけど……何かの総称か？

『その様子だと理解していませんね。では、簡潔に説明します』
「え、と……頼む」

月の朶、とやらの言葉に流されるように、説明を聞く。

なんでも、今俺がいるここは俺の知る世界ではなく、科学技術としての魔法というものがある、俺にとって未知の異世界というか、平行世界のようなものらしい。それで、俺は先程その魔法とやらを使って、生えてくる枝から自分の身を守ったそうだ。

大まかな概要ながら既に突拍子すぎて正直信じられないが、目の前の存在の事、でかい木の事、謎の三角形の事……それらに言及された上に、さっきまでの俺の置かれていた状況を考えれば、頷かざるを得ない話らしい。

それで、その話を信じるのならば、この月の朶とやらは使用者と

融合…ユニゾンすることで、内部から使用者を補佐する、魔法使いの杖のような物なのだそうだ。まあ、それも含めて大体の話は分かった。

しかし、それでも気に入らない、理解できない事がある。何故俺がこんな魔法なんていう、ファンタジー溢れる世界に喚ばれなきゃならんのか。

『それに関しましては…詳しくは分かりません。私は相性のよい、魔法の資質が高い者を探していたのですが、どちらも備えた主に何故か一度で行き当たりまして…思念通話を利用して接触を図っていました。まさか異界なのに繋がるとは思いませんでしたが、兎も角それで繋がったので、召喚魔法で主をお喚びしました』
「……」

なるほど、知らない世界からの召喚ね、なんともまた、本や映画などで慣れ親しんだものだが、まさか俺に降りかかるとは。ますます信じられなくなってきたが、信じないわけには行かないのだろうな。

なにせ、あんなでかい、しかも動く木があるなんて知らないし、そもそも黒や深紅の三角形、しゃべる宝石なんて俺の知っている世界じゃ説明の出来ないものだ。

因みに思念通話というのは、魔法使い…この世界で言う“魔導師”が会話するのに使う、テレパシーのような物との事だ。念話とも言うらしいが…別に大きな違いは無いよな？

そうか、あの炎の夢や“空耳”はお前の仕業か。おかげで俺がどれだけ苦労した事か…というかそんな行き当たりばったりで喚ばれる身にもなつて欲しい。元の世界での俺の立場がどうなっている事やら。天涯孤独みたいなものだし、クラスメイトや部活仲間とも特別親しかった訳ではないが、それでも馴染んだ世界と言うものに対し多少の未練は無い事もない。右も左も分からない世界よりはマシ、

と言った程度だが。

まあ、それもこの世界に残る理由が出来れば話は別だけど。

『炎の夢、ですか？ それは存じませんが… 兎も角、大まかにはそういう事です』

「…まあいい。それで、元の世界に戻ったりは出来るのか？」

『……お喚びしておいてなんですが… すみません、分かりません』

「そうか…」

『…しかし、妙な点があります』

今更何を言われても驚くまい。妙な点なんて、今ここに居る俺自身が妙な点みたいなものだ。と言うか、戻れないと言われた様なもののなのに、不思議にもショックが無いのはどういう事だろう？

『先程、木の枝から身を守るときに、私は主に失礼ながらユニゾンしてアームデバイスで…これはまた後程説明しますが… 咄嗟に防御しました。その際に出た魔法陣は三角形に剣十字、さらには私のようなユニゾンデバイスを使える主の特性から考えると、主の魔法は“古代ベルカ式”。これは妙です』

「どういう事さ？」

その、ベルカ式… 確か、話で聞くにはミッドチルダ式と二分する術式らしいが、それが使える事のどこがおかしいと言うのか。

魔法が使えるというのなら、そのどちらかが使えるんだらうつに。

『主に話したのは同じベルカ式でも“近代ベルカ式”であり、“古代ベルカ式”ではありません。たとえ主に魔法の才が有り、魔法を使用出来たとしても、使えるならばせいぜい今主流の“ミッドチルダ式”かそれを混ぜた“近代ベルカ式”でしょう。現在では衰退した希少な“古代ベルカ式”では間違っても有りません』

「はあ、そうなのか？」

『はい。さらに言えば、ユニゾンデバイスは“古代ベルカ式”と同様に廃れており、現在はほとんど使用している人は居ません。それを使用できるとするならば、”古代ベルカ式”を受け継ぐ者、あるいは過去に“古代ベルカ式”を学んだ者となります。何れにせよ、異世界から来た者が簡単に扱えるものでは有りません』

「……」

『にも拘らず、主はそれを扱われました。これはつまり…主は元々、何かしらこの世界と関わりを持つ人間ではないか、と言う可能性に繋がると思いますか？』

これはまた、随分と突拍子もない話だとは思う。壮大すぎて話が手に負えない気もする…が、しかし、考える価値は有りそうだ。

月の朧の言う事が正しければ、すんなりと俺が魔法を行使できた事、元々この世界にいた事が説明できなくもない。まあ、それでも全てが説明できる訳ではないし、記憶やら何やらと、突き詰めて考えれば違和感やおかしい点があるにはあるのだが。むむ…もしかして、元の世界でのことがおかしいのか？

うーん、ますます分からなくなってきた。これは、戻る戻らない以前に、自分が何者なのかをはっきりさせる必要があるなあ。

「…なるほど。仮にそうだとしても、今の俺は向こうの世界の住人だ。未知と既知、現状ではどちらの世界がいいかなんて決まってるよ。まあでも、そこら辺の理由を考えた所で元に戻る方法が分からないのは変わりない。なら次だ、どうして俺をこの世界に喚んだのさ？」

『……』

「どうした？」

『………分かりません』

「はい？」

『申し訳ありませんが、分かりません』

「……………どういう事だ？」

『何か急ぐ理由があつてお喚びしたのは間違いありません。しかし、無理な召喚魔法を使用したせいか、私のメモリ及び機能に一部破損が見られます』

「……………マジですか」

月の朧曰く“本来召喚魔法の使えないベルカ式で無理に、しかも異世界に居た存在を喚び寄せた事が相当な負荷になり、一部データ及び機能が失われてしまった”との事らしい。俺のせいではないと言つてはくれるが、少し責任を感じるのは何故だろうね？

具体的な破損内容を聞けば、主目的や一部魔法知識の欠損、融合騎としての実体化ができない事、中途半端なユニゾンになる事、というだけで、デバイスとしての機能以外には幸いにもそこまで深刻なダメージはないらしい。

かなり大変な事だと思っていたが、そういうもののなのだろうか？
まだ知識や実感の乏しい身としては良く分からないのが悔やまれる。

「……………まあ、分からない事だらけだけど、少しずつ考えていこう。俺は一応、俺自身についてと、その後の身の振り方を。お前は修復及び目的の達成を？」

『…そうですね。悩むより行動に移りましょう。では早速、起こしますね？』

「ん？ 起こす？」

『はい。ここは主の夢を元に私が構築した、仮想空間。いわば精神世界のようなものです。本当の主は今睡眠状態にあります』

「そ、そうか……………ああ、あの、枝に吹っ飛ばされて、気絶したときのままか？」

『はい。少し状況は進展したようですが。主の状態はそのときから

あまり変わっておりません。体調が回復した程度です」

「そうか、なら頼む」

『了解しました』

俺の言葉に応えるように月の朧が明滅すると、黒に包まれた世界は、一転して眩しい光に満ち溢れた――。

「ん……んん？」

どれぐらい気を失っていたのだろうか、目が覚めると、今度はどこかの部屋にいるらしいことが分かった。一瞬自分の部屋かと淡い期待を抱くが、部屋の中の小物はまったく見覚えの無い物ばかりで、それはすぐに裏切られた。夜の帳が下りて暗い部屋は殺風景で、その景色の中に鎮座する犬の置物が何ともシニールだ。

いよいよ、見知らぬ所に来てしまったのか……覚悟していたとはいえ、頭が痛い。

思わず額を押さえたけれど……あれ？ 何だか手が小さくないか？ 指や掌が全体的に幼いような……寸足らずな感じがするけど……。枕元に合った鏡を見る。なんとまあ……若々しい俺がいたよ。

「OK、夢だ。落ち着け俺……ここは夢の異世界……。簡素な部屋も、この置物も、夢だ……夢に違いな……い……おや？」

落ち着くために独り言を呟きながら、何となくベッドの隣で直立している置物に触れる。

夢とは言えやけにリアルな置物だよなあ。よく見ると所々動いているし、触れれば暖かくてまるで生きているようで……あれ？

「……置物とは、また失礼な言い草だねえ？ ええ？」
「……へ？」

置物が、喋った？

んん？ と言うことは…置物じゃなくて生きている犬？ いやでもこれは夢で…

「犬が、喋った？」

「…今度は犬扱いかい…これはお仕置きが必要だねえ」
「うえ？ ……い」

かぶつと。

それは訂正する暇も無く、およそ犬にしては似つかわしくない程の鋭すぎる牙が生えた口は、触れていた俺の手を見事に銜え込んでいた。

「痛ってえええええええええー！！！」

全力ではないのだろう、噛み千切られていないことが辛うじて分かる。しかし、痛みは的確に伝えてきて、これは出血も覚悟したほうがいいなと思わせる程だ。

この痛みは夢では味わえないだろう…味わいたいとも思わないが、ただ、夢じゃなくて現実だと認識するには十分すぎる痛みで、冷静な部分で体が若返った事は認めざるを得なかった。

「な、何！？ どうかしたの！？」

俺の叫び声に反応したのか、見知らぬ少女が部屋へと駆け込んできた。流れる金髪に、済んだ赤い瞳が美しい、ちよっとお目にかか

れないぐらいの美人さんだけど……誰？
と言うか痛い。離してくれ、痛い。

「くぁ……。ああフェイト、大した事じゃないよ。ちょっと躑を、さね」

何を言いやがるこの犬ところめ、躑けるならお前のほうだろうが！
というか何だよしゃべる犬って。異世界への召喚とか魔法とか、
驚く事はあったけど、これは別格だなオイ。

「何か言ったかい？」

「……さあてね」

牙を剥いて此方を向く様はなかなかに迫力がある。しかし、素直に何でも無いなんて言ってはこちらの負けになるような気がして、目を逸らす気にはなれなかった。

喋る犬？ はっ、いいとも認めるさ。初めは驚いたけどこの世界には魔法も動く木もあるんだ、今更犬が喋れても問題あるかっての。
上等だコノヤロウ！ 俺が直々に躑けて――

「……二人とも落ち着いて、いきなり何をしているの？」

「フェイト……」

「む……」

——と思ったら、少女に止められた。意図的に押さえているのだろうか、低くぼそぼそとした口調だけど、やけにはつきりと聞こえて……これが明るい口調だったらさぞかし魅力的だろうと思わせる声だった。

「……起きたんだね、怪我はもういいの？」

「…え？ あ、あー……歯形が増えた」

俺に話しかけているのだと一瞬遅れて認識し、多少の抗議の意味を込めて呟く。しかし少女はどう捉えたのか、薄く、しかし今までの無表情が嘘のように微笑むと、コクリと一つ頷いた。

…いや、まあいいけどさ。

「ええと、君が助けてくれたのかな？」

「うん…」

「そっか。ありがとう……あ、俺は水無瀬雄司って言うんだ」

「…私は…フェイト。フェイト・テストロッサ…こっちはアルフ…」

「そうなんだ、助けてくれてありがとうな」

「うん…」

「……」

「……」

か、会話が続かない…。

少女——フェイトは頷くだけで何か話すでもなく、犬はさっきからだんまりで、俺は何を話せばいいか分からない。

結果、そのまま無為な時間が過ぎていく——

S i d e フェイト

どうしようっ…いざ話を聞こうと思ったけど、なんて切り出せばいいのだろう？

そもそも、同じ年ぐらいの子と話した事もないし、きつかけが掴めない。まして男の子だよ？ 益々何を話せばいいのか分からない…。

（フェイト…）

アルフからの念話が届く。黙ってしまった私を心配してくれているのだろう。

（アルフ…）

（どうすんだい？ ジュエルシードの話を聞くんじゃないのかい？）

そうだ。気が付いたのならジュエルシードの話を聞かないと。

母さんが集めてるんだから、私が少しでも早く届けてあげるんだ。そのための手掛かりを聞き出すんだ。

（大丈夫…ちょっと戸惑っただけだよ）

（…そうかい？）

なおも心配そうに見つめてくるアルフに頷いて答え、小さく息をつく。

「あの…」

「っ…な、何かな？」

待つて。ふと思ったけど、いきなりジュエルシードの事を聞いても大丈夫かな？

持ち主ではないとは思っけど…もしこの人——ユージだっけ？ 彼もジュエルシードの事を探していたら、簡単には答えてくれない筈。場合によっては争う事にもなりかねない以上、遠回しに聞いた

ほうがいいかもしれない。

「えっと…どうしてあんなところで倒れてたの？」

「…あー…それは…何でだろうね？」

「？」

「いや、気が付いたらあんな所にいてさ。デカイ木に襲われたんだ」
「えっ…」

気が付いたらいたって…あそこでジュエルシードを探していた訳じゃないって事？ 本当に、巻き込まれただけ？

魔力反応の正体も…もしかして、魔力が高いだけの一般人？

普通なら疑うべきなのだろうけど、頬をかいて苦笑するかのよう
に言うユージは、嘘をついているようには見えない。寧ろ困惑が強く
感じられて、本当に事情を知らないように思える。

「……ジュエルシード、と言う言葉に聞き覚えはある？」

「ジュエル、シード？ うーん…聞いたことが無いなあ。宝石か何か？」

「ううん、知らないならいい…」

「そうか…」

まさかと思って聞いてみれば、案の定、何の反応も動揺も見せず、
ただ苦笑を深めただけだった。寧ろ、答えられなかった事が申し訳
なさそうで、凄くいい人なんだと思わせる。

やっぱり…本当に事情を知らなくて、ただ巻き込まれただけなん
だ…。これでは情報も何も得られないかな？

少し残念だけど、争わなくて良くなったと思うと安心できる。

（フェイト、これからどうするんだい？ この少年をどうするのさ？）

（行動は変わらないよ。拠点はもう一つの…遠見市？に移すけど、ジユエルシードを探す。ユージは、家に帰すよ）

（私達の事を知られているのにかい！？）

（うん、大丈夫だと思う。ジユエルシードの事は知らないし、魔力が高くて一般人ならそこまで障害にはならないよ）

（そう…それもそうさね。邪魔にならなければいいか）
（うん）

アルフの同意も得られたから、これで問題はないと思う。
後はユージがどうするかだけど、家には自分で帰れるかな？

「…えっと、ユージはこれからどうするの？ 家に帰れる？」

「え、家！？ あーと…。うん、そうだけど、まずはちょっと…」

「あー…その、図書館って何処にあるか分かるかな？」

「…図書館？ あ…確か風芽丘って所にあつたと思う…」

どうして図書館なんだろう？ 先に家に帰らなくていいのかな…
もう夜だし、ご家族が心配してるんじゃない？

「そうか、ありがとう。じゃあ、お世話になったね」

「え…？」

「いや、いつまでも世話になってると悪いからさ。どこかで時間でも――」

「そ、そんないいよ別に。もうすぐここも引き払うから」

「え？ でも…」

「…夜にそんな怪我人を外出させるのは気が引けるよ、明日の朝まで、休んでいかないの？」

「…ありがとう。じゃあ、そうさせてもらつよ」

申し訳なさそうに、だけど、どこか嬉しそうに礼を言ってくれたユージは、そのまま体を横たえると目を閉じた。そして、数分も経たないうちに静かな息遣いが聞こえてくる。

その姿に何故かほつとする。何だろう…何故か引き止めたかったのも不思議だけど、実際に叶うととても胸がすつきりする。

「お休みなさい…ユージ」

最後にユージの顔を一瞥して、アルフを連れて背を向ける。

「…お休み、フェイト」

「！ う、うん！」

まさか返してくれるとは思わなかったから、凄く嬉しい。勝手に緩んでしまう頬をアルフから隠しつつ、私は部屋を後にする。

これが、私と不思議な男の子、ユージとの初めての出会いだった――。

s i d e o u t

最初の出会い（修正版）（後書き）

第二話・修正版をお送りしましたが、如何でしたか？
拙筆ながら、楽しんで頂けると幸いです。

加筆修正しましたが、未だにうまく説明が出来ているか不安です。
ですので、是非ご指摘やアドバイスを頂きたく存じます。
更新速度は相変わらずですが、第三話は遠くないうちに投降できそうです。次回は図書館と言うことで、予想の付いた方もいらっしゃるでしょうが彼女が登場します。

最後になりましたが、読んで下さった皆様に変わらぬ最大限の感謝を。ありがとうございます。

今後も続きを投降できるよう、頑張ります。

片鱗（前書き）

お待たせ致しました、、『魔法少女リリカルなのは Another Knight』第三話をお送りします。

12/22 お知らせから第二話に上書きしました。

1/21 本文を改訂しました。ご迷惑をお掛け致しました。

片鱗

「困った……」

唐突だけど、今の俺の状況を言い表すならば、これ以上の言葉は無いだろう。

フェイトの家を後にして、昨日は話せなかった事やフェイト達の事を含めて月の朶と情報交換をしながら、ここ海鳴市内を風芽丘図書館なる建造物を探して歩いている。

『（正確には“彷徨っている”と言すべきでは？）』

うるさいよちくしょう。

そもそも朶、お前がナビゲートでもしてくれればいいのに。フェイトの居るところではだんまりで、昨日はほとんど役に立たなかったに。

『（出来なくは無いです、お勧めはしません）』

チカチカと、胸ポケットに入れたシルバーの朶、その上辺に付いた黒い宝石が点滅する。さっきから思念通話だからまだいいものの、普段からこんな様では気付かれると思うが。しかし、昨日はさかしくもジャケットの内ポケットに入って難を逃れたらしいし、案外気にはしているのだろうか？

ああ、今の俺の格好を言うなら、ジャケットに白地のシャツ、ダメージデニム、スニーカーといった出で立ちだ。内面は兎も角、外見は背伸びしたお子様のような気分で何とも恥ずかしい。この世界に来てからずっと同じだが、早く自分の家に帰って着替えたい。異世界とか言うのなら俺の家があるのかどうかは疑わしいが、そーい

うことも含めて、調べ物をするなら図書館はうつてつけだろう。
だから、行って色々調べようと言う訳で。

『（ナビゲートするには魔法を使わねばなりません。昨日は隠し通せたのに、今日になって見つかつては元も子も有りません）』

ああそうだとも。傍受できない訳ではないらしいし、昨日もし思念通話でもして気付かれて、“あなたは魔導師ですか？”なんて聞かれてたら、ごまかすのは大変だったろうさ。こちらとしてはフェイトに対するアルフの存在がいたから気付いて先手を打ってごまかせたが。

いや、初めはただただ驚いていただけだけど。冷静に考えれば……なあ？

兎も角、魔法は一般人には隠し通すものらしく、思念通話みたいな外からは分かり辛い物なら兎も角、普通はこんな所で軽く使うけにはいかないのだそうだ。フェイトは俺が一般人だと思っているだろうに、アルフの存在を隠していなかったが。あ、でも使い魔とやらは人型をとれば問題ないらしいし、いいのか？

うーん、何とかバレずに魔法が使えたらなあ……。

『（まあ、結界を張ればバレませんよ？）』

「（……マジかよ）」

『（かわりに魔導師に感付かれかねませんが）』

「（……どっちにしる駄目じゃねーか）」

『（ドンマイです）』

「……はあ」

「——あの一」

念話を切って嘆息を一つ。もうやだ。

帰って寝たい。そうだ、これは夢なんだ。この世界も念話なんて

魔法も夢で、現実の俺はまだ寝てて、この世界で眠れば目が覚めるわけ――

『（我が主？）』

「あのー、すみません？」

あーあー、聞こえない聞こえない。夢よ覚めるな。

ってそうか、そろそろ起きる時間かあ。今日は何曜日だっけ？

ああ、授業の用意してないな……。

『（現実逃避はそれぐらいにして、困ってますよ、その子？）』

「（へ？）」

「聞こえてへんのかな……？ あのー！」

「うおっ！？ な、何？」

「おお、やつと気付いてくれた」

物思いから帰還してみると、目の前に車椅子に座った少女がいた。年の頃は外見上の俺やフェイトと同じくらいか？　くりつとした瞳に、やや頬を染めた様は愛らしく、切り揃えられたボブカットが良く似合っている。独特な言葉のイントネーションは関西弁かな、とするとこの辺りは関西？

これまた美人さんな事で……フェイトといい、この子といい、出会った子みんな美人なのは何故だろうな？

と、俺の反応を得られたことがそんなに嬉しいのだろうか、少女は笑顔を浮かべる。が、それも一瞬の事で、今度は妙な視線で此方を見つめてきた。

え？　何……？

「あんな、お節介かも知れへんけど……こんなとこで独り言言っんはどうかと思うで？」

「え……？ 何か言ってた？ と言つか聞こえた？」

「うん。これは夢、とか、授業の用意、とか……」

「マジか……」

『（自業自得ですね）』

「うるさいな！」

「え……」

「ああいや、なんでもないんだ。ごめん」

「はあ……」

危ない所だった、自然に突っ込んできたから思わず返してしまっただけど、気をつけないとな。こんないたいけな少女を傷つけるのは嫌だし。

「ごめんごめん、気にしないで。それで、俺に何か用だったかな？」

「あ、そやった。あんな、こんな所で立ち尽くしてたからどうしたんかなーって」

「あー……ちょっと、道に迷ってね」

「道？」

「うん。風芽丘図書館って所に行きたいんだけど、この辺りには疎くて……」

本当はこの辺りの地理なんてまったく分からないけど。

「ふーん、そうなんや。じゃあ、案内しよか？」

「えっ？ いや、それは悪いよ」

「ええよ。私も行くところやから」

「そうなのか？」

「うん。本返さなアカンのよ」

膝にかかえていた鞆を開けると、本を二冊取り出す少女。

そういう事なら、ついでにお願いしようか。ありがたい事だ。

「……じゃあ、お願いできるかな？」

「勿論や。あ、私、八神はやていいいます。宜しゅうな」

「あ、うん。俺は水無瀬雄司。宜しく、八神さん」

「うん！」

小さな花が咲くように笑う少女——八神はやて嬢に頷き返すと、後ろへと回って車椅子の取っ手を握る。

「押すよ」

「あ……うん、大丈夫なん？」

「任せて。ゆっくり押していくけど、危なかつたら声を掛けてくれ」
「うん、分かった」

若干不安そうな顔をするけど、それは承知の上。

極力恐がらせないように、声を掛けながらゆっくりと押し出した――。

Side はやて

見知ったばかりの人に車椅子押して貰うなんて初めはかなり恐かったけど、どうやら杞憂みたいや。こうして話しとる間も一定のペースで押してくれとるし、曲がり角とか段差とか、注意せなあかるところもこっちに気を使って丁寧に進んでくれとる。足が悪いっ

てだけやけど、かなり気にしてくれとるみたい。

水無瀬雄司君、かあ……何て言えばええやるか、妙な子や。悪い意味とちゃうんやけど、こうして車椅子押してくれとるし、話もきちんとしてくれる。けど……何でか自分のことは話してくれへん。こつ、話しかける度に要領を得ん答えやったり、はぐらかされたりする。なんか違和感を感じるんや。

何処に住んどるか聞いても、聞いたことも無い地名を挙げるし、学校の事とか聞いても同じで分からへん。

しかも、社会とか芸能界とかの話題に淒く疎いみたいや。自分の事以上に言葉に詰まるし、まるで全く知らへんようで、益々妙に思えるわ。

ホンマ妙な子やな、ちょっと興味湧いてきたわ。

「……着いたで、ここや」

「おお……意外と近かったなあ」

「せやでー」

ゆつくりと歩いて、20分前からんぐらいやるか、無事に風芽丘図書館に到着。ささ、ずずいっと中行こかー。

「結構大きいな」

「雄司君のここよりも大きいの？」

「あー……まあ、そうかな、多分」

やっぱり微妙な回答や。

「そっぴや、私は本返して、また借りるだけなんやけど、雄司君は何か借りんの？」

「いや、調べ物をしたくてさ」

「そうなんかー、何調べんの？」

「えーと、ほら、俺土地勘無いから、地図とかそういうのをさ。ついでに社会や歴史も学んでおこうかと……」

「あはは、さつきえらい焦ったからなあ」

「うぐ……へいへい、その通りでございますよ」

その顔、ちょっとオモロイな。

うーん、でもやっぱ妙やな。社会や歴史なんて、この日本で生きてたら多少は嫌でも目に入るやろつし、そういう資料にも触れる機会もあるやろつに……。

「……まあええわ、これで堪忍したる」

「あんまりからかうなよなー、図星は痛いんだぜ？」

「まだまだ平気そうで何よりやんか。それじゃ、私はあっちやから」
「ん、押さなくて平気？」

「ええよ、慣れとるし」

「そうか、ありがとうなー」

ヒラヒラと手を振る雄司君を後目に、貸し出しカウンターへと車椅子を進めて、さっさと本を返す。すぐさま、借りる物は決まってるから、それを取ってきて貸し出し処理。

ホンマなら館内の本を色々見て回るけど、今回だけは別や。

あの妙な少年、水無瀬雄司をこっそり観察して、感じた違和感を解消するんや。

「そーつと……」

急いで本を借りて引き返し、地図や郷土資料がある所を覗き込んでみれば案の定や。件の少年はすぐに発見できた。

けど何やろ、妙に落ち込んだるように見えるんは私の気のせいや

るか？

肩は落として背中丸まっとるし、雰囲気暗いし、何や『世界の終わり』って印象や。

ちよ、大丈夫かな？

「……雄司君？」

あまりにその姿が心配やったから、隠れて観察する事も忘れて声を掛けたんや——。

S i d e o u t

可能性としては考えていない訳ではなかったが、実際に直面してみると衝撃は計り知れないものがあるようだ。少しぐらい予防線を張ったところでどうにかなる物ではなく、かつて感じた事の無い程の重圧となって肩に重くのしかかってきているようだ。

現に今、自分の家が無い事、それどころか、全く自分の知る土地じゃない事がはつきりと目の前に示されて、どうしようもなく力が抜けていくのを感じる。それは今後の身の振り方や、生活をどうすればいいのかという事に漸く思い至り、拍車を掛けていた。

「……雄司君？」

誰かが俺を呼んでいる。けどそれも耳から耳へ通り抜けていくようだ、反応する気がしない。

「雄司君？ 雄司君！」

先んじて心配するべきは衣食住のうち、食と住か。しかし、金も伝手もない状態でどうすればいい？ 働こうにもこの姿では無理だろうし、そもそも働くに際し必要な身分証やらがあるかどうか――

「雄司君……！」

「――は！？」

肩に衝撃。そして、ぐるんぐるん揺れる世界。流石に流す事が出来ずに視線を上げれば、八神はやて嬢が真剣な目をして俺の肩を掴んで揺さぶっていた。

「八神さん！？ な、何かな！？」

「漸く気付いたな……大丈夫？ 何やえらい落ち込んでたみたいやし、私の声も届いてないし」

「あ、ああ……いや、何でもないよ……」

いつから居たのか、見られていたのか分からないが、人から見て分かる程、ましてわざわざ指摘される程に動揺していたらしい。

誤魔化しに笑って言ったものの、その声の堅さは自分のものでは無いようだ。果たして、上手く誤魔化せたかどうか……。

「嘘や、そんな顔して言われても説得力無いわ」

く……やはり失敗か。

これは、もう下手な事言って誤魔化すのは無理だろうな。とはいえ、正直に話せる訳がない。

「いや、でも、本当に——」

「何でもないって？ あんな、そりゃ雄司君にも事情があるやろし、それを私が軽々しく聞いていいのかは分らんよ？ でも、そんな顔しといて『気にするな』なんて、そんな無理やわ。隠したいなら顔とか悟られんようにせなアカン」

「う……むう……」

「見ず知らずの人ならそれでも誤魔化せるかもしれないけど、私はもう知ってしまったしな。気になってしまったんやで、しゃあないわ」

「ぐぐ……」

「せやる？」

「……仰る通りです」

全く、いちいち正論で何も言い返せない。

にしても……せいぜい10歳程の少女に諭される中身高校生ってどうよ？

いや、はやて嬢は年の割には随分と大人びた考え方を持っていると思うけどさ、この子も何か訳ありなのか？ ああ、来る途中に聞かれるだけでなく、色々聞いてみるべきだったかも……。

それは兎も角。

「その……確かに事情はあるんですが、話し辛いと言いますか……話しても信じて貰えないと言いますか……」

「うん、やつと認めたね。聞かせてくれるんなら聞いたるし、信じるかは兎も角、少なくとも否定はせえへんよ」

眦を下げて頷いてくれるはやて嬢。

いい子だなあ。見ず知らずだった俺をここまで気に掛けてくれるなんて、昨今の日本人らしからぬ人の良さだ。

そつだな、話してしまおうか。もう俺にはお手上げだし、第三者からの意見が参考になる事もあるだろうし。

「……そうか、ありがとう」

「ええよええよ」

「うん……」

「……」

「……」

「……」

しかし、それっきりで後はだんまり。

……え？ いや、話すとは決めたけど……ここで話せと？

確かに今周りに人は居ないけど、いつ人が来るか分からない以上話し辛い事には変わりないし。俺が言えた物ではないけど、そもそも、図書館は静かにする場所ではなからうか。

「……ええと、ここで話すのかな？」

「うん？ あ、ここはアカンね、さっきちょい大きめの声出してもうたし。ん……そや！」

「？」

「ええとこあるんよ。人はおらんのに落ち着いて話が出来るとこや。よし、そこに行こう！」

「え？ あ、ちよっ……？」

頷くやいなや、固まる俺を無視してさっさと車椅子を進めるはやて嬢。

そのまま固まっている訳にもいかず、何処に行くのかも知らないままにその後を追いかけた。

その後、図書館を出た所で追いつき、行きと同じく車椅子を押す事が出来た。が、相変わらず行き先は教えてくれなかった。

途中、俺がはやて嬢と出会った場所も素通りして、なおも進む。会話らしい会話も無く、時たま『ここを右や』『そこは左な』といった方向を指し示す以外の言葉は交わされない。

何とも沈黙が気まずいけど、はやて嬢は気付いていないのか気にしていないのか。兎も角ひたすらに道を進む。

どれぐらい歩いただろうか、気まずさに耐え、何を話すかを考えているうちに目的地に到着したらしい。

「着いたで。ここや」

「ここって……？」

目の前には一軒の家。結構な大きさだが、まさか……？

「人はおらんけど落ち着いて話せる場所。私の家や！」

「やつぱり……ってそうじゃなくて、確かに落ち着くかもしれないけど——」

「ええからええから、ただいまー」

戸惑う俺を後目に、車椅子にも拘らず手馴れた仕草で家へと入っていくはやて嬢。なるほど、全体的に階段ではなく坂になっているし、ドアも大きく、余裕を持って開くようになってるし、バリアフリーの進んだ家なのだろう。

……いやそんな事考えている場合か俺。

「どしたん？ はよ入リーや」

「えー！ と……お邪魔します……」

ドアから顔だけ覗かせるはやて嬢に急かされ、おずおずと家の中へと入る。てつきり家族の誰かが居ると思ったが、予想に反して誰も出てこない。出かけているのだろうか？

なるほど、人が居ないとはこの事か。

「こつちやで。適当に座っててやー」

「あ、ああ……」

誘われるがままに、リビングダイニングとなっている部屋へと案内され、とりあえず指されたソファーに座る。

そこに、お茶と菓子を運んできたはやて嬢が、机を挟んで反対側に陣取った。

本格的に話を聞こうと言う事か。

「さて。じゃあ、話を聞こかー」

「……」

いや、そんな軽いノリでいられると話し難いのですよ、お嬢さん？
しかし、此方の意図なんて全く想像がついていないのか、じつと俺を見つめている様に他意は感じられない。ただただ話を聞こうとする姿勢を貫いているようだ。

……黙っているのも居心地が悪いな。

「あー、何から話せばいいか……纏まりが無いかも知れないけど、それは許してくれ。そうだな……俺はこの世界の人間じゃない、とでも言おうか」

前置きを適当に、核心から話す。気が付けばこの世界にいた事、元々は別の世界にいた事、魔法の事――。

でかい木に襲われた事、フェイトの事は直接関係が無かったから

話さなかったが、それ以外については起きた事をありのままに話した。

「はー……魔法って、そんなものがあるん？」

「ああ、そうらしい。これは直接目で見てくれれば早いだろう、な、
栞」

『……忘れられているのかと思いました』

「な、何！？ 誰や！？」

今までずっとだんまりだった月の栞に声を掛けると、若干の無言の後、すねた様にポツリと答えてくれた。

それに対し、はやて嬢が面白いように驚いている。ちょっと痛快だな。

『我が主、私を彼女の前へ』

「ああ」

「へ、何や？ カード？」

『どうも、八神はやてさん』

「カードが喋った！？」

いちいちいい反応をするなあ。

それにしても……今までシリ阿斯だったのに、いつの間にかぶち壊しの雰囲気になっているとはこれ如何に？

「そいつが栞。魔法っばいだろう？」

『はい、とは何ですか主！ 魔法技術の結晶に向かって失礼な』

「ははあ……、スゴイなー。これが魔法かあ……」

「俺も半信半疑だったけど。まあ色々あって、信じる事にしたんだ」

「そかそかー」

色々と言うのは、木に吹っ飛ばされたりとか、喋る犬に噛まれたりとか、身をもって体験した事柄だが……ここではそれは割愛しよう。うん。

別に言う必要は無いだろうし、栞と自己紹介をし合っているはやて嬢は既に受け入れたようだしな。

くれぐれも言うておくが、俺の名誉のためではない、断じてない。

「そうかー、なるほどなあ。話し渋った理由が分かったわ。となる」と、この後どうするんや？」

「……それがお手上げでさ、知らない世界だから伝手も先立つ物も無いしどうしようかと。この際、第三者として何か意見は無いかなーと思った次第で」

『情けないですね』

「うるさいよ、要因が何を言うか」

『う……すみません』

「いや、深刻に返されても困る」

『気にしているのに言うからです』

「……ですよねー」

指摘された痛い事実、何となく投げやりな気分になって栞との適当な掛け合いでお茶を濁す。

しかし、はやて嬢には何を思ったのか、じっと黙っていて乗っこない。

何か考え事かな？

「ええと、八神さん？」

「なあ、雄司君」

「な、何でしょう？」

恐る恐る問いかけてみれば、予想とは違う真面目な返答に背筋が伸びる思いがした。何を言うつもりだろうか？ まさか、何かしら手段を思いついたのか！？

「あのな……行く当ても頼りも無いなら、ここに住めばええんとちやう？」

「は……？」

『へ……？』

ココニスメバエントチャウ……？ いや、何語？

はて、英語なら自信があつただけどなあ……最近は良く分からん言語ばかりで困——じゃなくて！！

いやいや、そんなイイ事思いついた！ 見たいな顔で言われても意味が分かりません。

「な、何を急に！？」

「幸い部屋は足りとるし、私は構わへんよ」

「いや、そんなイイ笑顔を浮かべれば良い訳でも無くてね？」

「私がキチンと面倒見たるから、問題あらへん」

『不束者ですが、どうかよろ——』

「だあーっ、お前はしばらく黙れ！」

「いやいや、こちらこそ」

「ちよつと待て！ いいから待て！ 四の五の言わずに兎に角待て！！」

必死の思いが通じたのか、漸く黙って此方に向き直るはやて嬢。何やら不思議そうな表情をしています。不思議なのは俺の方です。

と言うかも、先程までのシリアスはどこいった……？

「そんなもの、元々薄れてたやる。というか何や不満かー？ それとも、何か問題があるのかな？」

「いや、問題大有りでしょーが。見ず知らずの俺を家に住まわせるなんて、大問題だろう？」

「もう見ず知らずとちゃうで？」

「いや、でも、家族の方が何と言うか……」

「あ、言うてなかった？ 私、一人暮らしなんよ。両親は死んでおらんねん」

「えっ……あ、その、ごめん」

唐突な打ち明け話に何も言えず、ただ謝るだけしか出来ない。急に深刻な話をされても反応に困る。

……いや、俺がこの場合は悪いか。

「ええんよ、今まで一人やったけど。もう違うやんか」

「う、ぐ……しかし」

しかし、そんな俺の言葉にふざけるでも悲しむでもなく、ただ純粹に此方を見つめる眼差しは真摯だ。どういった感情の果てにこんな眼差しが出来るのか、俺には分からない。分からないが……その余りに澄んだ目からはただ慈愛が感じられて、応えてやりたいと思わせる。

しかし、それは叶わない……叶えられない。生活する上での世話やかかる迷惑を考えると、領けなかった。

はやて嬢もそれを察したのか、真摯な表情に笑みを混ぜ、やや相好を崩しながらも口を開く。

「……どうしても、領けへんか？」

「……ああ。申し出はともありがたいけど、それだけに、迷惑を掛けられないよ」

「そつか……そつかあ……」

「うん。せつかくだけど、ごめんな……」

はやての、落ち込んだ残念そうな声が胸を抉る。

とてもありがたい好意を無碍にするのは後る髪どころか、体すべてが引かれる想いだが……かかる迷惑を考えると断らざるを得ないんだ。そもそも、俺みたいな住所不定無職の不審者が普通に考えて赤の他人にそこまでお世話になるのも申し訳ないし、人として駄目だろう。

「そつかあ……“見捨てる”んかあ……」

「ああ。……本当に済まないと——んん？」

今、なんて？

「あーあ、そつかあ、水無瀬雄司君は“女の子の一人暮らしを見捨てる”んかあ……」

「……へ！？」

な……何ですと——！？ 見捨てるって誰が？ 誰を！？ どうして！？！？

いや待て落ち着け俺、びーくわいえっと！ いや静かにじゃない、落ち着けびーくーる。兎に角落ち着け。そうだ、ここは素数を……いや、敢えて元素記号を暗唱するんだ！ 水兵リーベ僕の船、七曲シップスクラーク閣下、スコッチ手袋は待てよここにも数がある。

……いや終わりだよ！ 残りは知らねーし！！

オーケーオーケー、兎に角話そう。対話は理性的な交渉の一步だ。交渉って時点で何かおかしいが気にするな俺！！！！

「ややっ、ややや八神サン？ 貴女様は一体何を仰ってくれちゃっ

てますか!？」

「んー? いやあ、水無瀬雄司君はこんな可愛くてか弱い女の子を放って行く、冷たい人なんやなーって」

「いやいやいや! 普通に考えれば分かるだろ? 迷惑になるからって——」

「ええよって言ったよな?」

「いやいやいやいや! ほら見ず知らずの——」

「もう見ず知らずと違うで?」

「いやいやいやいやいや! でもほら、えっと、その……ぐう」

「反論は無いな? まあ何言つても却下するけど」

なんとという言論統制か。

嫌確かに言い返せないけど。言い返せないけどー!!

「ほら、何と云うか言葉に出来ないけど……兎に角駄目だろ? あつ! そうそうこんな前代未聞な——」

「なら私らが前例になればええやん」

「うつ……」

まさに封殺ですか。

……はあ。

そこまで言うならもう何も言うまい。このままじゃ意見は平行線だ。だから……視点を換えよう。

住む住まないは別にして、どうしてそこまで固執するんだろうか。そこまで思い遣ってくれているのはありがたいけど、それには八神嬢にとってメリットが無い。いや、俺が気付かないだけかも知れないけど、それでもメリットは少ない筈だ。一体どうして……?

「いやでも、何でそんなにこだわるんだ?」

「それは私の台詞でもあるけど……。せっかく迷い込んだ獲物……」

ん、コホンコホン！！　せっかく見つけた仲間やのに、お別れなんてなあ？」

「今“獲物”って言ったよな！？」

「気のせいやろ？　兎も角“仲間”ううん、同じ生活をする“家族”みたいになれるかもしれへんにそんなん……寂しいやんか」

「あ……」

今までの様子が一転、“家族”という言葉を口にした瞬間の表情に、今までとは違う意味で何も言えなくなる。

『……主』

今まで沈黙を保っていた栞までもが口を開く。その意味は、間違える事無く理解できた。

「………分かった、分かったよ。元々俺にとってはありがたい話だ、厄介になるとするよ」

「あ……！」

『まったく、初めから素直にしておけば宜しい物を』

「うるさいな、分かったよ。………と言う訳だ。宜しく、はやて」
「勿論や！　宜しくな、栞！　雄司！！」

ほら、正解だった。涙まで浮かべて喜んでくれたらなあ――。

片鱗（後書き）

如何でしたでしょうか？

そう遠くない内にとっと思っていましたが、予想以上に時間が掛かってしまいました、すみません。

書いてみたはいい物の、今回はかなり書きにくかったように思います。間違いが多そうで戦々恐々ですが……ご指摘があれば直したいと思います。

土台はある程度固めたので、いよいよ本格的に魔法に関わると思いますが……どうなるかは私自身楽しみです。

最後に、読んで下さった皆様に変わらぬ最大限の感謝を。ありがとうございます。

今後も続きを投降できるよう、頑張ります。

追記（1/21）

本作の轉載先にて、第三話本文中に重大な間違いがあることが発覚したため、本文後半を改訂致しました。

本作読者様を初め、ご指摘して下さった方々、そして他所様にて連載中の著者様には大変ご迷惑をお掛けし、申し訳ありませんでした。

今後はこの度の私の間違いを糧とし、皆様により楽しんで頂ける作品を模索する事を誓います。

そして叶うならば、誠に勝手ながら皆様には変わらずご愛読して頂けるよう篤くお願い申し上げます。

2010年1月21日 『魔法少女リリカルなのは Another Knight』執筆者 志暮

日常？（前書き）

お待たせ致しました、『魔法少女リリカルなのは Another Knight』第四話をお送りします。

1 / 3 0 誤字を修正しました。

日常？

その後、八神はやて嬢……いや、はやてが冗談抜きで真面目に説明し、嘆願なんてしてくれたので、俺はそのままはやて宅へと居候する事が決まった。

いや、一人暮らしで家族がないという事だけでなく、足が不自由で生活がし辛いとか、通院先で心配されているとか、明るい顔で辛い事話されるとね……ちよつと、断りきれないと言いますか。

いや、それでも、上手く乗せられたという気がしないでもないけれども。まあそれはもういい。

兎も角、そういう訳でお世話になる事に。掛かる迷惑や生活費などは将来まとめて返すからと譲らなかつたけど、それがはやての何かツボに入ったらしく『そんな将来とか、嫌やわ……まだ私ら会ったばかりやし、子供なのに早いで』なんてニヤケ顔で言われ、バンバン背中を叩かれた。くそう、俺は真剣に言つたつもりなのに……どこに笑う要素があつただろうか。というか、顔が赤くなるまで我慢しなくても、笑いたければ笑えばいいのに。

栞に愚痴つてみれば『主つて……いえ、何でも有りません』とか切り捨てられるし、意味が分からん。うらぎりものめ。

まあ……それでもどうにか、生活基盤は作る事に成功したわけだ。良ししよう。

「——以上、これが家の間取りやけど……聞いたつた？」

「あー、大丈夫。ありがとう」

掛けられた声に意識を元に戻すと、怪訝な表情を浮かべるはやてに頷き返す。俺に割り当ててくれた部屋の案内に始まり、はやての部屋や風呂場、果ては倉庫と隅々まで案内されたが、取り敢えずは理解した。一人暮らしにしては広すぎると思わなくも無いが、余裕

のある造りとなるとこういうものなのだろうか？

だが、こんな広い家に一人では寂しさも一人だろくに……いや、余計なお世話かな。

『私が記憶しましたので、問題ありません』

「そか、ならよし。ええな、主と違って頼りになるなあ」

『それほどでも……ありますが』

おい？

「流石に室内で迷子とか有り得ないって」

「いやー、魔法ってすごいなあ」

『魔法ですから。それより、他に何かありますか？』

無視ですかそうですか。

「ほな次は……あ、もうそろそろお昼やな。ほら、雄司も、ご飯にしよう」

「けっ、どうせ俺は根無し草の無職……ん、もうそんな時間？」

「ふふん、家で一人やないご飯は久しぶりや！腕によりをかけんとな！」

「いや、その……質素で結構ですよ？」

「遠慮せんとき！ ああ楽しみやなあ」

俺をからかっていたと思うと一転、言葉の端々に今までの大変だったであろう生活が滲む……正直、何と言葉を返せばいいのか困る。はやて本人は気にしていないようだけど……なあ？

いや、俺も似たような物だったけどさ、でも“いない”訳じゃなかったからな。

そう考えると、俺がここにいる事で少しははやてにプラスとなっ

ているのだろうか。……だと、いいな。

「はやて、俺も手伝うよ」

「ん？ それはありがたいけど……できんの？」

「ばっか、一人暮らしなめんな」

「あ……そやったね」

ちよ、そこでシリアスになるなよー。家庭事情はお互い納得の上で教えあっただけだろうに。

ってそこ、栞！ 『お互い様ですね』とか、さも訳知りみたいに明滅するな。いやまあ事実だけどさ。ほら、俺はもう整理ついでるけど、はやてがそっだとは限らないし。

「ほら、昼飯作るんだろ！ メニューはどうするんだ？」

「あ……うん、そやね。それじゃ……オムレッツ作る！」

妙な雰囲気切り替えるために話を振るが、どうやらそれは成功したらしい。

頷いたはやての顔は、敢えて乗ってくれたのであろう、やや無理していると分かるがそれでも笑顔だった――。

「――ご馳走様でした」

「お粗末様やな。どやった？」

「美味かったです。オミソレイタシマシタ」

「ふふー、せやろ？ 料理には自信あるんよ」

「ぐう、たかがオムレッツ……されどオムレッツ……」

『無理です主。彼我の戦力差は絶大です。私も食べたかったっ！』

「うるさいなちくしょう。ええい今回は俺の負けだはやて！　しかし中華ならまだ……っ」

「あれ？　いつから勝負になったんやろ……と言つか、中華もできるよ？」

「……」

『ドンマイです、主……』

あれから、はやてと一緒に料理をしたのだが……正直、手伝いは要らなかったのじゃないかと思う程の料理の腕を見せ付けられた。いや、俺も自炊しててそこそこの料理の腕は自信があつたが、はやてはそれ以上だった。

「まあまあ、手伝ってくれて楽やったよ？」

「うぐっ……」

『はやてさん、敗者にわざわざの情けは不要ですよ』

「あ、ははは……ゴメンなあ。って、その言葉も酷くない？」

『そうですか？　……ああ、確かに。まあいいでしょう』

はやての言葉もそうだが、このフォローのようでトドメの菜の言葉も同じく痛い。

と言つかこの二人、特に菜は、主らしい俺を差し置いて仲良くなっているとはどういう事ですか？

「まあまあ、そない凹まんでも……分かった、ほな仕事や。気分切り替えやー？」

「……仕事？」

『汚名返上のチャンスっ！』

塩を塗りこむ気が貴様！

「と、それは兎も角、仕事って何だ？」

「んー、雄司って着の身着のままここに来たんやろ？ 仕様がない
とは言え、いつまでもその格好はアカン」

「まあそうだけど……どうしようもないぞ？ 栞が服でも出せれば
別だけど」

『騎士甲冑なら兎も角、服は無理ですね』

「騎士……ああ、戦闘用の衣装みたいな物だっけ？」

『そうです。厳密には衣装ではなく鎧ですが……兎も角、衣類とし
て着るのはお勧めできません』

「だよなあ」

「や、それはそれで興味あるけどな……兎も角、服が要る訳や！
という訳で、買って来ましょう！」

買って来いって……。

いや、着の身着のままですからお金が無い訳で、しかもこの辺り
の地理は皆無だ。

それははやても知っている筈。となると……。

「ハイ先生」

「何や雄司君？」

「流石にそこまで迷惑を掛けるのは——」

「拒否や」

「いやしかし——」

「却下や」

「でも——」

「棄却や！ そもそも、居候の面倒を見るのは家主の責任やし、ず
っと同じ服着られるのも見ていて嫌や。素直に面倒見られんか！」
「むう……」

『素直に好意に甘えましょう、主。いずれ何倍にもして恩返しすれ

「は良いのですから」

「栞の言う通りやで」

そこまで言われては俺も額かざるを得ない。

「はあ、はাতেにはほとんど恩がたまっていくなあ……返し切れなくならないといいけど。」

「分かった。そういう事なら、恩に着るよ」

「ん、それでええ。ほな……と、これが資金と地図や」

「了解。もし迷ったら栞、任せたぞ」

『分かりました』

「あと、こっちが買い物リストな？」

「はいよ。……ん？」

資金と地図は兎も角……買い物リスト？

「このリストは？」

「せやから、買い物リスト」

「うん、それは聞いた」

「行くならついでに買ってきてー」

そういう事か。

「あ、嫌やった？」

「まさか。世話になっっているんだし、これぐらいな。単に強かだなあと」

「ふふん。まあホンマは私も行きたいけど、洗い物とか、雄司の部屋の片付けとかあるからなー。変わりに頼むんや」

成る程、ありがたい事だな。

ならば、早めに行って帰って来て、はやてを手伝う事にしよう。
世話ばかり掛けて、俺自身が何もしないのは駄目だしな。

「ん、了解。それじゃ、早速行って来るよ」

「うん、任せた」

「んじゃ、行ってきまーす」

『行ってきます』

「行ってらっしゃい、慌てんでええから気つけてな」

脱いでいたジャケットを羽織ると、内ポケットに栞を差して、はやて宅を後にした――。

はやての地図と栞の補佐があれば、目的地まで時間はかからなかった。自然と買い物に当てられる時間が多くなり、自分の衣類も頼まれ物も買い揃えることが出来て良かった。

「（ふむふむ、俺の使えるベルカ式と言うのは近接による個人戦闘に特化した魔法形態という事か）」

『（はい、詳しく話しますとそうなります。そして今は私がお預かりしています……先程説明しましたアームドデバイスが、魔法使いの杖みたいなものとなります）』

「（ああ、武器型のデバイスだな。どういう物なんだ？）」

『（武器型だからアームドと言う訳ではなく、ベルカ式のデバイスだからと言う考え方もありますが……武器としての強度に優れる代わりに、魔法補助機能に劣っているデバイスです。ミッドチルダ式のデバイスとは真逆ですね）』

予想以上に時間がかからなかったのですぐ帰ろうかと思ったのだが、栞の『せっかくですのでこの辺りの地理を把握しておきましょう』と言う言葉に頷き、どうせならと、魔法について詳しく思念通話で聞きつつ歩いている訳だ。

『（そして、そのアームドデバイスと騎士甲冑を用いて戦闘を行うのがベルカ式魔法であり、優れた使い手は“ベルカの騎士”と呼ばれます）』

「（へえ……騎士と言うと、騎士団みたいな物もあるのか？）」

『（現在は分かりませんが、かつてはベルカ式魔法を扱う者達の集う“聖王教会”というものがあり、そこに“教会騎士団”という、騎士の集まりがありました）』

「（なるほどな）」

歩きながらかなり集中した会話をしているが、足並みに乱れは無い。これは無自覚で行っていた事なのだが、この世界の魔導師は一つの意識で複数の事を行うことが出来る、いわばマルチタスク的な事が出来るらしい。何とも便利な事だとは思うが、何分ほとんど無意識で行っていたので感覚的には兎も角、知識としては掴みづらい。栞曰く“無意識で感覚的に使いこなせるのは才能”らしいのだが、良く分からない。まあ、出来ているのなら問題はないだろう。

『（そうですね……知識としてはこれ位でしょうか。あとは実際に使ってみれば分かるかと）』

「（いや、実際戦闘なんてしたくないデスヨ？）」

これは本音だ。勿論、こういう技術がある以上使われてきているのだらうし。俺自身もいつか使うときが来るのかも知れない。それこそ、先日のようにデカイ木に襲われたりしては使わざるを得ない

だろう。

だが、出来れば使いたくない。魔法を使うという事はそういう事態になっている事であり、そんな事態とは係りたくないからな。

ただ……これはやはり爺さんの血か、それとも武に携わっていた者としての性質か、単純に腕比べとして、その騎士と呼ばれる者達には興味がある。

『（おや、その思考、もしや主は戦闘嗜好者ですか？）』

「（ちげーよ、単純に俺の力がどんなものか確かめただけだ）」

『（ふふっ、ベルカの使い手らしいですよ）』

「（はいはい、ありがとよ）」

『……拗ねる事はありませんよ、これで安心してお渡しできるというものです。……どうぞ、これを』

「（？……って、これは？）」

何処からとも無く、眼前に光る何かが落ちてきた。小さな十字の金属片と、長い糸のようなもので構成されているのが光の中、辛うじて見える。

こんな事態、周りに人がいればちよつとした騒ぎになるかと思っただが、見回してみれば他に誰もいないようだ。いつの間にか栞が思念通話ではなかったのも頷ける。

いくら閑静な住宅街の、さらに一步奥に入った裏路地とは言え、これはなあ……っていやいや、まずは光る何かの事か。

右手は荷物を持っているので左手の掌で受けとって見れば、チェーンで繋がれた先に、シルバーの十字架らしきものが付いている。らしきものと言うか……下へ行くに連れてシャープになっていて、まるで剣のミニアチュールの様にも見える。

「ネックレス……？」

『これが主のアームデバイス、銘は“グラム”です』

「グラム……？」

『Ja・Guten Tag・Ein Meister』

「へ？ あ、どうも……って喋った！？」

『主、声を抑えて下さい。余り大きいとさすがに人に聞かれます』

「と、すまん……でも仕方ないって。喋るなんて聞いてないぞ？」

『意思があるのはインテリジェントデバイスだけの特権じゃありません』

どことなく、不満そうな聲。いや、不満と言うより……これは、怒っている？

……触らぬ神に祟りなし、だな。

「そ、そうか……グラムだったな、宜しく」

『B i t t e』

「ん」

『……ふむ』

流してデバイスとやり取りしている俺を眺め、妙な声を上げる聲。なんだ？ お怒りかと思えばそんな不審げな……。

『いえ、主、グラムの言葉が分かるのですか？』

「へ？ ああ、さつき“宜しくどうぞ”って……」

『Bejahung』

「ん、そうか」

『……参考までに、今のは？』

「んん？ “肯定です”じゃないのか……？」

『ふむ……』

さつきからフムフムと、何なんだ？

『……主、いつの間にかベルカの言語が分かるようになってますね
「うん？」」

今グラムが話していたのって、ベルカの言葉なのか？
何となく意味が掴めたんだけど……言われてみれば、発音が何か妙だよな。

『初め、私が話しかけた時には分からなかったのに、今になってわかるとはどういう事でしょう？』

「いや、それを俺に言われても……」

言ってる事が何となく分かるってだけなのに、明確な回答などあるはずが無く。

『……まあいいでしょう。理由は兎も角、今のところ何か問題があるわけでも有りませんし。余り襲いと日が暮れます。戻りましょう』
「そうだな……おっ？」

掌のネックレス——グラムを何とか首に掛けて襟の中に入れ、裏路地から大通りに出たところで気付いた。

「あれは……フェイト？」

前を歩く三人組の少女。そのうちの一人、腰まで流れてた日の光を反射するような金髪に見覚えがあった。残り二人の黒の長髪と茶髪を二つ結びにして居る子には見覚えは無かったが、友達だろうか？

『我が主？ どうしました？』

「いや、ほら。あそこにフェイトがいるだろ？ ちょっと挨拶して

おこつかなと」

『フェイトさんですか？ いえ、あの子は違——むぐっ』
「お前はバレないようにな？ おーい！」

胸元を押さえて栞を沈黙させると、三人組へと声を掛ける。しかし、聞こえていないのか三人組は振り返らない。

『（ですから主、彼女らは——）』
「（念話もマズいつて、ほら静かに頼むって）」
『うぐっ』

押さえた胸元から思わずといった様子の声に一瞬焦るが、どうやらそれも気付かれていないようだ。ふーむ、ここまで気付かれていないなら、一つ驚かせてみようか。

そつと足音を殺して接近し、ポンポンと肩をたたく。ゆっくりと振り向くフェイトに——。

「いよう！ フェイ——あれ？」
「はい？ ……何よアンタ？」

振り向いたのは見ず知らずの少女でした。
あれあれー？ なんだこれは？

「…………ええと、どちら様？」
「アンタねえ…………それはこっちの台詞でしょうが！」

予想外の事態に思考は停止。咄嗟に繰り出した問いは怒りとなって返却。

どうしよう？

「アリサちゃん、知り合い？」

「初対面よ。そう聞くて事はなのは知り合いでもないのね……
すずかは？」

「うっん……知らない……」

固まる俺。怪訝な顔して見つめてくる茶髪。やや怯えた様子で、
目を合せようとしない黒髪。不機嫌そうな表情で睨みつけてくるフ
ェイトではない金髪。

何となく居心地が悪くなってきた。間違いなく自業自得だけど。
これはあれですか、俺が悪者扱いですよね？

「アンタ、何なのよ？ 私達に何か用？」

「え？ あー……いや、そのー……（栞、ど、どうすればいいと思
う？）」

『（静かに、と言われましたので答えられません）』

「何よ？ ハッキリしないわねっ！」

ぐ……さっきの行いを根に持つてるな、栞。

「いやまあ、不幸なすれ違いと言いますか……偶然の産物といいま
すか……（栞、悪かったから、これはお手上げなんだって）」

『（……はあ。簡単な事です。人違いだと謝りましたか？）』

「はあ？ 何言つてんのよ？」

あつ、言われてみれば……第一印象とそのやり取りから失念して
たけど、別に何か被害を出したわけでもないし、そもそもまずは謝
らないとな、うん。

そして誤解を解いてサヨナラだ、よしこれで行こう！

「何と言つか……ゴメン！ 人違いなんだ！ 後姿が似てたから……」

……」

「はあ……そうなの？」

「ああ、君みたいな綺麗な金髪でさ、つつい……」

「えっ……そ、そう……？」

「うん……それで、声掛けるまで気付けなくて……ホントごめん！」

「い、いいわよ別に……うん……。気にしないで……」

「ありがとう。それじゃ俺は行くよ、本当にごめんなさい。そちらの二人も」

「にやはは、別にいいよ」

「お、お気になさらず……」

「良かった、ありがとう。それじゃ！」

「……え？ あ、ちよつとアンタ——」

三人全員に謝って、そのまま駆け出す。

いくつか角を曲がるも、幸いな事に追ってくる様子はなく、どうやら成功したらしい。本当に良かった、栞様々だな。

「（助かったあ、ありがとうな栞）」

「（べ、べつにアンタのためじゃないんだからねっ！）」

「（……はい？）」

何だって？

『（……いえ、失言でした。忘れてください）』

「（な、何なんだ？）」

『（何故か分かりませんが、対抗しなければと思っただけです。お気になさらず）』

「（そ、そうか……？）」

『（そうなんです！ さあ、とっとと戻りましょう。予想以上に時間がかかりました）』

何やらおかしな発言連発の栞だが、言っている事は間違いではないか。余り時間を食ってはやてを手伝えないといけないし、そもそも今まで歩き回っていたのは余分なのだ。すぐに帰るといふ意見に否は無い。

ならば、もう寄り道せずすぐに帰るとしよう。

これ以上何かおかしなことを言われてはたまらない、やや足を速め、早歩きではやての家へと戻ることにした――。

日常？（後書き）

如何でしたでしょうか？

前回で魔法に関わるみたいな事を書きましたが……すみません、まだ先になりそうです。

そして……キャラの性格や口調が正しいか心配です。特に関西弁は難しいですね。

後、これは余談ですが……

魔法、特に使い魔や融合騎について、悩んでいます。Wikiやアニメでは割と大雑把だったように思いますが、書くとなると詳細が欲しいところですね……。

最後になりましたが、今回も読んで下さった皆様に変わらぬ最大限の感謝を。ありがとうございます。

続きはそう遠くないうちに投降できるよう、頑張ります。

危機一髪（前書き）

お待ち致しました、『魔法少女リリカルなのは Another Knight』第五話をお送りします。

危機一髪

「なあ栞、俺の使える魔法って具体的にはどんな物なんだ？」

『具体的に、にですか？』

早朝。漸く朝日が届くかどうかと言った時間帯の公園。

ベンチに脱いだジャージの上着と、その上に置かれた金属製のプレート。明滅するソレ——月の栞と、誰も居ないのを良い事に直接言葉を交わす。

この世界に来て以来、ご無沙汰だったトレーニングを再開して暫し、ふと思ったので聞いてみたという訳だ。

「いや、ほら。こうしてて思ったのだけど、魔法も鍛えられるなら鍛えたほうが良いんじゃないかなーと。才能？はお前が保障してくれてもさ、俺なんてど素人も良い所だし」

『成る程……では、実際に使ってみますか？』

ああ、使えたらいいねえ……ってマジですか！？

軽い気持ちで言ってみただけだけど、いささか予想外の返答だなオイ。

「出来るのか！？　と言うか、こんな所で使って大丈夫か？」

『普通に使うのは拙いですが……結界を張れば問題ありません』

結界って……ああ、そういえばそんなことも言ってたな。

「でも、それをしては他の魔導師に気付かれるんじゃないか？」

『直接目撃されなければ大丈夫ですよ。幸い周りに人は居ませんし。まあ探知魔法を使われれば危険ですが、こんな早朝に使うとも思え

ませんし、範囲に入らなければ問題ありませんし、大丈夫かと」

ふーむ、そういう事なら……やっぱ試してみたいな！

勿論、鍛えるとかそういう目的はあるけど……何より、やはり興味は引かれるわけで。

「つて、俺結界の張り方なんか知らないぞ？」

『大丈夫です。基本はグラムが教えてくれますから』

『?berla?es mir』

「そうか、じゃあ任せるよ」

『Jawohl』

『では主、早速騎士甲冑を展開しましょう』

「……へ？」

『大丈夫です、グラムが補助してくれますから。ささ、ずずいっと

！』

「……いや、どうやって？」

そんな、いきなり展開しろなんて言われても。

『……そうでした。ではまず、グラムを起動しましょう』

「起動か……」

『難しくは有りません。グラムを軽く握り、意識を向けて下さい』

「ふむ」

『まずは最初ですので使用者承認の為の起動呪文……パスワードが必要です。とは言え、今のグラムは例えるならば“未契約”の状態ですから、どのような事でもかまいません、言葉を掛けてください。ただ、後から変更できませんので、ご注意を』

「む、分かった。やってみよう」

いきなり難しいことを言う。俺は名前とか考えるの苦手なだけ

どな……。

というか、起動呪文って……必要な事とはいえ、微妙に恥ずかしいと思ってしまうのは普通だよな？

「……」

『難しく考えなくても構いません、浮かんだイメージをそのままに呼びかけて下さい』

いや、難しく考えている訳じゃなくてな？ まあ難しくもあるけど……ほら、恥ずかしさが先に立つと言うか。それに、どうせなら拘りたいじゃないか。

んー、グラムか……。うん、確か北欧神話に出てきた剣に同じ名前のものがあつたな。案外、その剣をモチーフにしたものだったりして。

しかし待てよ？ “グラム” は英語表記での発音だったはず……。この世界での英語とミッドチルダ語が類似性を持つというのは、先日戯れに聞いた栞のお陰で分かっている。同時に、ベルカ語と類似している言語もある事が。だとするならば、余り詳しくは無いけれど、ベルカ語で言うなら名前は“グラム”ではないのでは……？
ふむ……。

「なあグラム。本当の名前は何て言うんだ？」

『はい？ 主、一体何を？』

『……E s i s t B a l m u n g . “M e i n L e i t e r ……”』

『な……グラム！？』

やはりか。

にしても……ははっ、“使い手”では無く“我が主”か。これは、漸く認められたと考えてもいいのかな？

ならば、俺が呼ぶべき名前は——何故だろうな、あの銘しか思い浮かばない。

「——其は神話に伝わりし者。不遇を怒りに変え、強大なる龍を打ち倒す剣。今こそ顕現せよ、我が手に！」
“B a l m u n g A n f a n g ! ! ”
「J a w o h l ! ! 」

言い終わるや否や、握った拳から光が溢れる。

思わず閉じた目を開くと、拳には鞘に収められた細身の剣が握られていた。何の変哲も無い剣かと思ったが、刃の鰐元に良く分からない機構が付いていてやや機械的な印象を受ける。他には特に装飾の無いシンプルなフォルムだが、実用一辺倒と言った様で好ましく思える。俺の手には長すぎるが、今のこの体格ならば当然か。しかし、重すぎることは無い……寧ろ、不思議とよく手になじむのはありがたい。

鞘から抜いてみれば、メタリックに磨きぬかれた片刃の刃が光を反射して輝く。

『それがグラムの……いえ、“バルムンク”でしたか、その者の基本形です。さしずめ、シュベルトフォルムとでも言うべきですかね？』

「なるほど……剣形態、ね」

『それにしても、急に何を言い出すかと思いました。……なるほど、真にデバイスに認められたと言う訳ですか。私でも知らなかったのに……一体何故ご存知で？』

何故と言われると……さて、何故だろうね？

ただ、直感に従って呼んだ銘が“バルムンク”だったからなあ。思い浮かんでこれしかないと思ったただけだし、案外、縁でもあった

りしてな？

「……なんとなく、そう呼ぶべきだなんてね」

『良く分かりませんが……思ったより冷静ですね？』

「あ、いや……名前はいいんだけど。実は、剣は苦手だったなあと……」

爺さんに教わった中では一番下手だったしなあ。

なんて感慨に耽っていると、心なしかバルムンクの輝きが鈍った気がした。

え？　もしかして俺のせい……？

「バルムンク……？」

『Bedauern』

「いやいや、そう落ち込むなって！　俺が腕を磨けば良いだけなんだから、頑張ろうぜ！」

『Ja!』

力強く応えてくれるバルムンクに頷き返す。確かに今のは俺が悪かったな、すまんバルムンク。

そうだな、武器が何であれ、やる事に変わりはない。形が何であれ、俺の相棒となったのだ。使えないと言ふのなら、使えるようになるだけだ。

『まあ、他の形状を取ることも可能ですが、それが基本形です。慣れるのが一番良いでしょう』

「それはまた気になるけど……そうだな、先に慣れないとな」

とりあえず、鞘に納めようとした所で……何と鞘が消えた。文字通り、スツと一瞬で。

え、なにこれ？　もしかして、根に持ってますかバルムンクさん……？

『心配ありません。不必要な際には作らないだけです』

「そ、そうなのか……、どうやって仕舞ったんだ？」

『そうですね……最も近いイメージで言えば、デバイスの構成する圧縮空間に仕舞っています』

「ソウデスカ……」

そんな事まで出来るのか……何だろう、良く分からないが深く突っ込まない方が良さそうな気がする。

「あ、そう言えば、この妙な機構は？」

『それはカートリッジシステムと、排煙口です』

「……何ですかそれは？」

『カートリッジシステムは文字通り、圧縮魔力を込めたカートリッジを使用する事で、瞬時に爆発的な魔力を得るシステムです。そして、その際に出た魔力の排出煙を逃がすのが排煙口です』

「へえ……便利なものだなあ。今も使えるのか？」

『Nein． Beautifully bitt e i n e P a t r o n e』

「カートリッジを入るって……えっ？　カートリッジ無いの？」

『Ja』

『作りましょう、主』

むう、そうそう甘くは無いか。

「どうやって作るんだ？」

『まあそれは追々。では次に、いよいよ騎士甲冑を展開します。主の思う騎士甲冑をイメージして下さい。しかる後に、それを胸に強

くイメージしてください』

「胸に？」

『リンカーコアの話はしましたよね？ 胸元の魔力の元の事です』

「ああ、あれか」

なんでも、魔法に適正のある人間が持つ魔力変換・生成機関だったか。そこを機能させる訳ね。

ふむふむ…… 甲冑と言うと、箆手とか外套とかのあれだな？ でも、見たままの甲冑なんて動きづらいらしいし、ガッチガチの鎧は勘弁だな。ある程度は軽装な方が良いか……。

それでいて“騎士らしい”ねえ……。

「うーむ……」

バルムンクを翳し、足元に深紅の三角形の魔法陣が浮かぶのを一目見てから、目を閉じて俺オリジナルの騎士甲冑をイメージする。

動きやすさを重視しつつ…… イメージは…… と、一瞬、眼前に夢に見た炎が浮かび上がり、次の瞬間には俺自身を焼き尽くさんばかりの熱が体中を駆け巡る。

「……っは！？」

思わず目を開けると、既に俺の姿は一変していた。

上半身がタイトな黒いアンダーウェアに包まれ、その上に半袖の赤いジャケットを羽織り、胸元を黒光りする鎧が覆っている。腕は指なしのグローブ、手の甲から前腕に掛けて、動きを阻害しないように金属板が付いている。防御と言うよりも殴打に使えるような形だが…… その方が都合がいいか。これ一つで凶器になりそうだ。

一方下半身だが、穿いていたジャージは黒いズボンに変わり、まるで拘束しているかのように何本もベルトが巻きついている。靴は

同じく黒いブーツだが、つま先と踵、そしてこちらにも甲を覆うように金属光沢を放つ甲板が覆っている。

手甲と足甲のようで一見、どこか格闘技の道着のようだが……甲冑と、そして、腰に巻いたベルト、そこから下半身を覆うかのよう伸びる赤い腰布と前垂れが優雅に靡き、粗野な雰囲気打ち消して見紛う事無く騎士を思わせる。

「これが……騎士甲冑」

『Ja』

『……お気に召しましたか？』

「ああ、凄いな……」

イメージしていたとは言え、思った以上によく出来ている。手触りなんて本物の布や金属とそう変わらないし、着心地もかなりよく、懸念だった重さや動きにくさも無い。

恐るべし、魔法技術……。

あつ、これってもしかして、ファンタジーな世界で言う“変身”ってヤツじゃないか！？

おお……傍から見ると胡散臭いとか、夢見すぎとか思っていたけど、実際に自分でしてみると感動が大きくてそんなことどうでもよくなるなあ……。そうかあ、マンガやテレビアニメとかのヒーロー達はこんな気分だったのかあ……。

『時に主、魔力変換資質の事は話しましたか？』

「ん？ 変換？」

『……いえ、何でも有りません。余り多くの事を言うのもどうかと思いますし、早速結界を張りましょう』

「？ そう？」

『はい。百聞は一見に如かず、詳しくは使いながら覚えるのが宜しいですから』

騎士甲冑が展開できた嬉しさに、栞の話聞いてなかったのだけ
ど……まあ、問題ないよな？

兎に角、これでいよいよ結界を張る——初めての魔法行使となる
訳か！

ちよつと緊張するな。

『では、実際に結界を展開してみましよう。術者が選択したものを
それ以外と隔離する結界ですが、今回は主を残すので、魔力の有無
で条件を組みましよう』

「イメージすればいいんだな？」

『そうです。まあ、慣れない内は細かな操作もバルムンクがこなし
てくれますので、主は魔力の制御にご注意を』

「了解」

『余り大きな結界にする必要はありません。軽く魔力を使用すれば
宜しいかと』

「やってみるよ」

軽く、ねえ……。良く分からないし、とりあえず感覚でやってみ
よう。

細かいところはバルムンクが引き受けてくれるらしいし、任せて
も大丈夫だよな？

「……よし。バルムンク！」

『Gef? ngnis der Magie』

微かな喪失感。

足元に浮かんだ三角の魔法陣を中心に、世界がたちまちに色を変
える。圧倒的な速度でソレは広がると、すぐに端が見えなくなるま
で広がった。

「……こんな感じかな？」

『いえ、たかが力試しなのに魔力を使いすぎです。この分では町全体に——』

「ん？」

広がりきつたと感覚で分かる結界に、脳内で音が鳴るかのような反応があった。

「反応有り、だ……」

『はあ、主が残るのだから当然では？』

「いや、俺じゃない。結構遠いところだ」

位置的には結界の端の方だな。中心なら俺かもしれないが、端なら俺ではないだろう。

それに、反応は大小二点。しかもこれは――

「――徐々に、近づいて来ている？」

『何ですって？ 結界を広く張るから見つかるのですよ！』

こちらを目指して一直線に進んでいる。幸い速度が遅いのか、接触するまでに多少の時間はあるが、それもこうして戸惑っているうちに刻一刻と短くなっている。

……もしかしてこれは、俺以外の魔導師か！？

下手打ったか。魔力持ちの少ない世界で、こんな時間なら尚更平気だなんて……甘かったか。どうする、どうすればいい？ 下手な接触は面倒な事になることは明白だが、避けたくてもこちらの事は気づかれている。

『仕方ありません主、魔法を解除して逃げましょう』

「ぐつ、それで何とかなるか？」

『分かりませんが、このまま何もしないよりはいいでしょう。迷う時間も惜しいです、すぐに離脱を』

「それしかないな。バルムンク！」

『Ja』

応答と共に、急速に色を取り戻す世界。

甲冑は消え、Ｔシャツにジャージ姿へと戻る。それと同時に、バルムンクは元のネックレスとなって手の中に納まった。

『今すぐこの場から離れましょう！』

「ああ、大分と接近されていたからな。急ごう！」

バルムンクを襟の中に入れて栞をポケットに、そして上着を羽織って走り出す。

最後に感じられた反応はもうすぐこの地域に入る所だった。一刻も早くこの場から立ち去らないと魔法を使っていなくても正体がバレてしまう。

周りに他人が居ない事がここに来て仇となったか。

「——にやつ！？」

「きゅっ！？」

「っ！？」

鈍い衝撃と、続いて妙な、短い悲鳴が上がる。

焦って左右を確認しなかったのが拙かったのだろうか、公園を出ようとした所で誰かにぶつかってしまったようだ。

こんな時に限って！　しかし、無視するわけにもいかないか……。

「いたたたた……」

「ごめんなさい、大丈夫ですか？」

尻餅をついている人——珍しい事に、よく見れば女の子のようだが——に手を差し伸べつつ、一応安否を尋ねる。

ついでにちらりと背後を見やるが、他には誰も居ないようだ。そろそろ魔導師なら着いていても良い頃だが、上手くごまかせたと言う事だろうか？ 或いは、魔法を止めたから追えなくなったとか？ どちらにせよ、危機は去ったと判断しても良さそうだな、良かった良かった。

と、手が引かれる感覚。

慌てて視線を戻せば、女の子が立ち上がる場所だった。軽く引き上げてそれを手助けする。

そう言えば、声は二人分聞こえた気がしたけど、この子だけか……？ まあいいか。

「あ、ありがとう……ごめんね、ちょっと急いでて」

「いや、俺こそ。前を見てなくてごめんよ」

「ううん、お互い様だよ。……あれ？」

「？」

何かと思えば、俺をじっと見つめる女の子。

うーん、何だろ？ 何となく見覚えがあるような気が……お、肩になんかいるな。イタチ？ と言うか何だあのアホ毛っぽいものは？ むむ、疑問が尽きない。

「……やっぱり！ アリサちゃんとぶつかったナンパな人だ！」
「ぶっ！？」

な、ナンパな人！？ それはもしかして……もしかなくても、俺の事か！？

「いきなり何を……初対面で失礼じゃないかな？」

「初対面じゃないよつ。昨日、アリサちゃん——金髪の女の子に声掛けたでしょ？」

む？ 確かに声は掛けたけど、あれは人違いで、その場に居た子達と合せて謝ったはず——あれ？

「……あ。あー！ あの時居た茶髪のほうか！」

「茶髪じゃないよ、なのはだよ。もう、謝ったのもすぐ忘れるくらい軽い気持ちだったんだー、アリサちゃんの言う通りだね」

「むっ……」

茶髪少女——高町なのはさんとやらが頬を膨らませて俺を睨む。

が、どうにも迫力と言うか、怖さに欠けるその顔はちょっと……いやかなり面白い。

ふーむ、道理で見覚えがある訳だ。

と言うか、あの時は話の分かるいい子だと思っていたのに……。

「まあいいか。で……ええっと、茶髪さん？」

「むー、なのはだよっ！ 高町なのは！ 覚えてよう。ええっと……な、ナンパさん」

「何だと！？ 俺だって水無瀬雄司って名前があるんだ、ナンパ呼ばわりされる覚えは無いぞ！」

「むう……」

「むむ……」

にらみ合う事暫し。俺は勿論の事、なのは嬢も全く譲る気は無いらしく、ぷっくりと膨れて視線は全く逸らされない。栞が何か言っていたが、どうせ俺に対する苦言だろうから詳しくは聞いていない。

しかし、こうなつて来ると意地でも譲りたくなつてくる訳だが、どうにもそれは厳しいと理解せざるを得ない。

だってなあ……あのオモシロ顔ですつと俺を睨んでくるんだぜ？

「……」
「……」

しかも、俺は兎も角、向こうは真剣らしいし、これは笑うなつて言う方が無理だ。

——俺、結構頑張つたよな……？

「……」
「……ぷっ」

「あ……！」

「……くくっ、ふふふ……あはははは！」

「笑った！ ふふーん、私の勝ちだね！ じゃあ、私の事はなのはつて呼ぶんだよっ？」

何を言ってるんだか……。

「くはははは！ は、腹痛い……ふふふふ……」

「……ね、ねえ？ 大丈夫……？」

「む、無理……そんなオモシロ顔で……くくっ」

「お、オモシロ顔！？」

あ、何やらショック受けてる。その顔も面白いて……！

「ふふふ……はー、笑った笑った。それでえーと、高町さん？」
「……」

おおっ……！？ 地面にのの字を書く人って、本当に居るんだなあ。

うん、笑いすぎたようだ。すまない。

「高町さん？」

「……」

「高町様？」

「……」

うお！？ もつと沈んだよ！？
逆か……。

「あー、なのはさん？」

「……もう一声」

な、何だと？

「えー、なのはちゃん？」

「……う」

おっ、ちょっと耳が赤くなった？ んー……良く分からないけど、
もう一押しって所か？

何だかなあ……。

「ええーと……なのは？」

「……ひどいと思うの」

よしよし、漸く顔を上げたな。

「な、なにがでせう？」

「……初対面で、しかも女の子に対し“オモシロ顔”とか、ひどいと思うの」

「あ、もしかして自覚あった？」

「なっ、なんて事言うかな！？ そんなの無いよう！」

ほう、薄々はあつたつて感じが。

「うん、それについては何と言うか、悪かったね、ごめんよ。それで――」

「ホントに悪いと思ってる？」

「いや、悪かったよ本当に。ゴメンナサイ。それより――」

「ゆうじ君ナンパだから、分からないもん……」

「そ！ れ！ よ！ り！」

「わ、分かったよ……」

こいつも根に持つタイプか、面倒臭いなもう。自業自得と思わなくも無いけど！

それより、大事なことを忘れてるだろうに。俺も忘れてたけど！

「な、何かな？」

「何かさ、急いでたんだろ？ 行かなくていいの？」

そう、それだ。俺はもう良さそうとは言え、さっきまで逃げたのだ。出来る事ならこの場から離れたい訳で。

そして彼女も、ぶつかって俺と一緒に時間を浪費したとはいえ、元々急いでいたのではなかっただろうか？

「あ……ああーっ！ ゆ、ユーノ君！」

「きゅ？」

そんなワタワタと取り乱して……いや、動転するのは分かるけどさ、動物に話しかけても無駄じゃないかな？

そういえば、公園に入ってきたんだよね？ 俺とぶつかったという事は、公園に用があったのか？

……まさか、なあ？

「……まあ、間に合うといいな。それじゃっ！」

「え？ あ、待つ——」

何故かその場から動かずに、じつと公園を覗き込んでいる後姿に声を掛け、走り出す。後ろからは制止の声らしきものが掛かるが無視だ、もしかして何らかの理由で遅れて魔力の持ち主が現れないとに限らない。

もう来ないと思うが、念には念を入れてさっさとこの場から離れるに越した事は無いだろうからな。

後ろからはなのは嬢が追いかけてきているが——悲しいかな、その足の速さではな……。ほら、二、三回角を曲がれば見えなくなつた。

「……やれやれ、ここまでくれば安心だな。魔力の持ち主といい、なのはといい、大変な目にあったな」

『全くですが、自業自得でもありますよ。あんな広範囲に結界を張らなければ見つかる事は無かった訳ですし、見つかる事が無ければ少女ともぶつかりませんでした』

「ぐっ……まあ、なあ……。事実だけに何も言い返せないな」

『まあ、魔法について知る事が出来たので良しとしましょう』
「そうだな」

何とも、骨折り損のくたびれ儲けになったような気がしないでもないけど、いいか。高い授業料みたいなものだろう。

「少し遠回りして、帰るか」
『そうですね』

知らぬ間に結構時間を食ったようで、既に日は高くなっている。
腹も減ってきたしさつさと帰ろうと、俺は止めた足を再び動かした
――。

「――おかえり」

「ああ、ただいまはや……て？」

「こおんな朝早うから、どこ行つとつたんや？」

「は？ いやその……ちよつと体を鍛えていたもので、その癖でラ
ンニングに出かけた次第ですが……あの、何故お怒りなのでしょう
？」

「ふうん……分からんか？」

「しょ、小生にはさっぱり……」

「そうかあ……ほな聞くけど、何で私は“どこ行つとつたか”と聞
いたんやろなあ？」

「へ……？ あ、あの……もしかして、私めは事前に言っていませ
んでしたでしょうか？」

「そつやね……事前に聞いたつたらこんな聞き方すると思うっ。」
「い、いえ……」
「そつやろつなあ……まあ、ええわ。次からは気をつけてや？」
「了解致しましたっ！」
「ん、よしよし」
「ほっ……」

「……あつ、そうそう」
「……はっ、何でしょうか？」
「そんなに元気なら、朝ご飯抜きでええよな？」
「なっ……」
「……返事は？」
「了解、です……」

危機一髪（後書き）

後書き 如何でしたでしょうか？

まず初めに、前回第三話の修正では失礼致しました。今後は前回の間違いを活かし、よりよい作品をお届けできるよう内省いたします。申し訳ありませんでした。

さて、今回でいよいよ魔法に触れましたが……まだまだ、ほんの一部に過ぎませんね。どうにも、展開が遅くなってしまいます。

そして今回の話ですが、苦戦しました。魔法やデバイスについて自分なりの解釈を元を書いてみたのですが、正直分かり易く説明できているかどうか心配です。

特にデバイスについて。術者とデバイスとが信頼関係を築くにはどうすればよいかと考えた結果で、狙っていたのですが………どういう反応となるか、楽しみであり、恐ろしくもありですね。

最後になりますが、前回の修正を含めて読んで下さった方々に変わらぬ最大限の感謝を。ありがとうございました。次回もまた、そう遠くないうちにお会いできればと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8694i/>

魔法少女リリカルなのは Another Knight

2010年10月9日06時29分発行